

最大の愛

無愛憎

は知らず、水は物を沾すと其水は知らず、佛は慈悲して慈悲を知らず。

【無雜假名法語】

③ 諸の佛は衆生の愛を以て其慈と成す、故にその慈最も大なり。

【禪餘外集】

④ 我はこれ世尊なり、能く及ぶものなし、衆生を安穩ならしめんが爲に、世に現じて大衆の爲に甘露の淨法を説く、其法一味にして、解脱涅槃なり、一の妙音を以て、斯の義を演暢す、常に大乘の爲に、而も因縁を作す、我一切を観ると、普くみな平等にして、彼此愛憎の心あるとなし、我に貪著なく、また限礙なし、恆に一切の爲に、平等に法を説く、一人の爲にするが如く、衆多も亦然なり、常に法を演説して、曾て佗事なし、去來坐立終に疲厭せず、世間

一視同仁

大悲を本とす

佛性と如來

母の如し

に充足すると、雨の普く潤すが如し、貴賤上下、持戒毀戒、威儀具足せる、及び具足せざる、正見邪見、利根鈍根、等しく、法雨を雨らして、而も懈倦なし。

【法華經】

⑤ 諸の衆生に於て、大慈心を生じ、平等にして二なきと、一子を視るが如し。

⑥ 三世の諸の世尊は、大悲を根本と爲す、是の如き大悲、今いづれの所在とかなさん、若し大悲なき者は、是則ち佛と名けず。

⑦ 大悲大悲とは名て佛性と爲す、佛性とは名て如來と爲す。

⑧ 佛は衆生の煩惱の患を見て、心苦み玉ふと、母の病子を念ふが如し。

【涅槃經】

佛は壽を分ち玉ふ

解脱せしむ

慈父

佛出世の意義

⑨ 大師釋尊、なほ二千年の佛壽を分て、末世の吾等を蔭ひ玉ふ、其意如何、たゞ父母の心を垂るゝのみ、如來は全く果を求むべからず、亦富を求むべからず。【永平清規】

⑩ 佛祖は大慈悲を運して、或は憫をして參禪せしめ、或は憫をして念佛せしめ、汝をして妄念を掃除し、本來の面目を認取して、箇の洒々落落々大解脱の漢とならしむ。

【天目斷崖禪師語錄】

【義雲語錄】

① 佛はこれ三界の慈父なり。

② 諸佛は大悲を因となし、衆生を縁となす、衆生は發心を因となし、諸佛を縁となす、若し因と縁と感應せざれば、諸佛は出世し玉はず、衆生は聞法せず、此に由て之を觀れば、因縁の義最も大なり。

【面山廣錄】

慈悲の輕重

佛の慈愛と父母の愛

慈悲の藏經

③ 譬へば人に七子ありて、其中に一子病に遇ふ時は、父母の愛、平等ならざるにあらずと雖も、然も病子に於て心偏へに重きが如く、如來も亦諸の衆生に於て、平等ならざるにあらず、然も罪ある者に於て、心偏へに重し。

【涅槃經】

④ 諸佛の慈悲にして、衆生を哀愍するは、自身の爲にせず、他人の爲にせず、たゞ佛法の常なり、見ずや小虫畜類の其子を養育するに、艱難經營苦辛して、畢竟長養するも、父母に於て終に益なきをや、然れども、子を念ふの慈悲あり、小物すら尙然り、自ら諸佛の衆生を念するに似たり。

【華道用心集】

⑤ 釋迦老子、一期出世して、大醫王と爲る、衆生の深く苦海

に沈むを憐愍し、此に於て慈を興し、悲を運んで、種々の方便を以て一大藏教を演出す、みなこれ病に應じて薬を興へ、一切の有情をして、大安樂の地に到るを得せしむる底の方子なり。

【永平廣錄】

第四節 佛陀の救濟

釋尊の大願

○釋迦佛は、淨土をば立てずして、濁りある世に諸の佛の淨土より退ぞけ棄てられたる惡業の深き衆生を救ふべしと云ふ願を立て玉ひたり、是を十方の諸佛、餘の佛の願よりも勝れたりとほめ玉ふよしを説かれて候、其外五百の大願を釋迦は立て玉ひたりと雖も、只衆生を一心を知る道に入れ玉はん爲なり。

【廿三問答】

誠と善

○佛は默するときは誠あり、語るときは善あり、至る所を

の道を以て人に勸めて惡を捨て善に趨かしむ。

【輔教編】

信心と救濟

○夫れ諸佛自在神道の力は、なほ大海の深ふして底なく、廣ふして涯なきが如し、信心厚きものは、利益を得ると多く、信心薄き者は、利益を得ると少し、信心なき者は、曾て利益なし、譬へば大海の水を汲むに、器の大小に隨て水に多少あり、器を持せざる者は、始より水を得ざるが如し。

【幽谷餘韻】

佛の出現

○三世の諸佛世に出現するとは、たゞ法を説て衆生を濟度せんがためなり、是を以て、四辨八音、竝びに説法の軌範たり、鹿苑、嶺鷲、またこれ度生の道場たり、祖師門下の單提獨弄して、ぢきに本文をしめす、乃至しかもその旨

理り同源一體の

⑤ 歸を鞠むれば、亦た法を傳へ迷を救はんがためなり。流轉の相實體あるとなし、夢幻の如く、空華に似たり。若し其本を窮むれば、則ち禍と福と源を同ふし、冤と親と體を一にす。佛祖の世に出興するは、別事たらず、唯だ衆生をして、此同源一體の域に悟入せしめんがためのみ。

【夢窓語錄】

無邊の生死

⑥ 我等が大師釋迦牟尼世尊、過去無數劫の其昔、善慧と云へる仙人にて在せしが、一切種智を得て、衆生を濟度せんとを冀ひ、妻帶肉食等を禁斷して、梵行を修し玉ひき、此の大願を成せんが爲に、五道に周遍して、一身死して復一身を受け、無量無邊の生死を経玉へり、天地の始終を窮て、これを一切と云ふ、其劫を経ると幾劫と云ふ數

佛の開教の次第

を知らず、一切衆生の生死の苦海に沈淪せるを救はんが爲に、一切智を求て、永劫生死の苦を忍び玉ふと夫れ是の如し。

【臨在家語】

⑦ 衆生元來盡くこれ無病の人なり、奈何せん一朝錯て五欲の食を貪り、三毒の飲に中て、終に八萬四千の病惱を受け、日夜安樂を得ると能はず、是を以て、醫王之を憐愍して、聲聞の病を見る時は、則ち四諦の藥を與へ、緣覺の病を聞くとときは、則ち十二因緣の方を説く、菩薩の爲には六度四攝の妙手を播く、乃至四十九年の説法、五千餘卷の聖教、總てこれ應病與藥の方術なり、若し能く之を聽き、之を習ひ、之を信じ、之を服するときは、豈に止だ病根立地に除くのみならんや、藥も亦用不著なり、之を藥

病相治と云ふ、之を眞個無病の人と謂ふなり。

【明菴語錄】

衆生の苦を苦とす

⑧ 如來、苦を受くるとも苦を覺へず、衆生の苦を受るを見れば、己が苦の如し、衆生の爲に地獄に居ると雖も、苦想及び悔心を生ぜず、一切衆生の異苦を受るは、悉くこれ如來一人の苦なり。

【涅槃經】

三界と救濟

⑨ 三界は安きとなし、猶火宅の如し、衆苦充滿して甚だ怖異すべし、常に生老病死の憂患あり、是の如きの火熾然として息まず、如來は已に三界の火宅を離れて寂然として閑居し、林野に安處せり、今此の三界は、皆これ我有なり、その中の衆生は、悉くこれ吾子なり、而も今この處は、諸の患難多し、唯我一人のみ、能く救護を爲す。

應身佛の救濟

女現身其二

其二

佛の慈憫

【法華經】

⑩ 若し諸の衆生、天主と爲て、諸天を統領せんと欲すれば、我彼の前に於て帝釋の身を現じて爲に法を説き、其をして成就せしむ。

⑪ 若し女人ありて、出家を學し、諸の禁戒を持することを好まんに、我彼の前に於て、比丘尼の身を現じて、爲に法を説き、其をして成就せしむ。

⑫ 若し女人ありて、内政に身を立て、以て家國を修めんとするに、我彼の前に於て、女主の身及國夫人、命婦大家とを現じて、爲に法を説て、其をして成就せしむ。

【首楞嚴經】

⑬ 大に衆生を慈憫し玉ふ。故に今我歸依し上る。善く

衆の毒箭を抜き玉ふ。故に大醫王と稱す。世醫の療治する所は。差ゆと雖も還て復生せず。如來の治し玉ふ所は。畢竟して復發らず。世尊は甘露の薬を以て。以て諸の衆生に施し玉ふ。衆生既に服し已て。死せず亦生せず。

【涅槃經】

法身と色身

第五節 佛身の相狀

① 諸佛の法身も亦復是の如し澄徹清淨にして影像なし、昔の大悲倦まざるを以て、衆生の業縁に隨て感應の差別あり、普く一切の色身三昧を現す、衆生聞見して益を蒙らずと云ふとなし。

法身は萬物に現す

② 諸佛の法身、普く衆生の心に徧して、既に同一の心ならば、云何を現と不現とあるや、答ふ、常に現じて、現せずと

云ふとなし、或は一塵に於て、頓に現じて具足せずと云ふとなく、或は諸塵に於て普く現じて、周徧せずと云ふとなし。

【宗鏡錄】

佛の三身 其一

③ 佛に三身あり、一に法身、二に報身、三に應身なり、神通變化ある佛は、三番目の應身なり、此は悟を開きて後に、人を利益する時、暫くの方便なり、これ程のとは、魔外も天狗も眞似するとあり、二に報身佛とは、智ある姿なり、第一の法身と申候こそ、實の佛の御心にて候、これ先に申つるやうに、佛に在ても、衆生に在ても、更に變らず、目にも見えず、耳にも聞えず、心にも及ばざる處なり。

【大應假名法語】

④ 善現、舍利弗に問て云く、何を以てか佛の眼と爲す、舍利

佛眼

古佛の心

不去不來

法身の相好

身相は相に非ず

弗答て云く、性空を以て佛の眼と爲す、善現嘆じて云く、善いかな善いかな、從上の諸佛は、みな性空を以て佛眼と爲せり。

⑤ 師因みに洞山問ふ、如何なるかこれ古佛の心、師云く、即ち汝が心是なり。

⑥ 我、如來を觀たてまつるに、前際より來らず、後際に去らず、今は則ち住せず。

⑦ 深く罪福の相に達して、徧く十方を照し玉ふ、微妙の淨法身相を具すると三十二、八十種好を以て、用ゐて法身を莊嚴せり、天人の戴仰する所、龍神も咸く恭敬す。

⑧ 須菩提、意に於て云、何、身相を以て如來を見上るべきや、

金剛の身

佛の三身 其二

不や、不なり、世尊、身相を以て如來を見上るを得べからず、何を以ての故に、如來所説の身相は、即ち身相にあらず、佛、須菩提に告げ玉はく、凡そあらゆるの相は、皆これ虚妄なり、若し諸相は相にあらずと見ば、即ち如來を見ん。

⑨ 如來の身は、無量億劫より、堅牢にして壊し難し、乃至當に知るべし、如來の身は、金剛身なるを。

⑩ 佛に三身ありと云は、化身、報身、法身なり、若衆生常に善根を作せば、即ち化身現す、智慧を修すれば、即ち報身現す、無爲を覺れば、即ち法身を現す、十方に飛騰して隨喜と救濟する者は、化身佛なり、感斷して善を修し、雪山に成道する者は、報身佛なり、無言無説、湛然常住なる者

淨身法 此一段過 ちて編入 せり讀者

は法身佛なり、若至理を論せば、一佛すら尚無し、何ぞ三あるとを得んや、此に三身と言ふは、但人智に上中下あるに據てなり、下智の人は妄りに福力を興して妄に化身佛を見、中智の人は妄りに煩惱を斷じて妄に報身佛を見、上智の人は妄に菩提を證して妄りに法身佛を見、上々智の人は、内照圓寂、明心即佛なれば、心を待たずして佛を得、是に智る三身と萬法と、皆不可取、不可説なるを、此即ち解脱の心、大道を成せるなり、經に曰く、佛法を説かず、衆生を度せず、菩提を證らずと、此之の謂か。

② 若身淨を得んと欲せば、當に此身は本貪欲不淨の所生に因て臭穢駢闐して内外充滿すと觀すべし、若此身を洗て淨を求めんとらば、猶塹を洗ふが如くせよ、塹盡る

諒せよ

法身

佛の相好

時は方に淨かるべし、此を以て之を驗するに、明に知る外を洗ふとは佛説に非ざるを。

③ 法身は本來受なく、飢なく、渴なく、寒なく、熱なく、病なく、因愛なく、眷屬なく、苦樂なく、好悪なく、長短なく、強弱なく、本來一物の得べき有と無し、只此色身の因ありと執するに縁て即ち飢渴寒熱瘴病等の相あり、若執せずんば作爲するに一任して、生死の中に大自在を得、一切の法を轉じて、聖人と與に神通自在、無礙處として安からずと云と無し。

【少室六門】

④ 夫三十二相八十種好、神通光明等は、皆諸佛の本體にあらず、是世間の有爲最尊最勝の相を借て、且く小根の衆生をして戀愛せしむるのみ、是故に轉輪聖王に三十二



佛に經戒  
善惡なし

法身と色身

相あり、諸天外道に神通光明あり、乃至阿修羅、神仙、大力鬼、老狐、老猫の定力ある者皆此變化を行ふて、種々の態を成す、一掬の水も澄む時は物を現はし、千里の海も動する時は影なきが如し。  
【宗門無盡燈論】

④ 佛は經を誦まず、佛は戒を持たず、佛は戒を犯さず、佛に持犯なく、亦善惡を造らず、若佛を覓めんと欲せば、須く是見性すべし、性は即ち是佛なり、若性を見ずんば、念佛誦經、持齋、持戒も亦益する處無し、念佛は因果を得、誦經は聰明を得、持戒は生天を得、布施は福報を得るも、佛を覓むるとは終に得ざるなり、若自己、明了せずんば、須く善智識に參じて生死の根本を了却すべし。

⑤ 四大の色身は即ち是煩惱、色身は即ち生滅なり、法身は

佛と本心  
及體用

常住にして所住なし、如來の法身は常に變異せざるが故に、經に云く、衆生應に知るべし、佛性本自ら之を有するを、迦葉は只是本性を悟得す、本性即ち是心、心は即ち是性なり、即ち此諸佛の心に同じ。

⑥ 佛とは亦法身と名け、亦本心と名く、此心形相なく、因果なく、筋骨なし、猶虚空の取るを得ざるが如し、乃至この心は四大色身の中を離れず、若此心を離せば、即ち能運動すると無し、是身無知にして、草木瓦礫の如し、身は是無情なり、何に因てか運動せん、若自心动すれば、乃至語言、施爲、運動、見聞、覺智、皆是心の動なり、心动すれば、用動ず、動は即ち其用なり、動の外に心無く、心の外に動無し、動は是心にあらず、心は是動にあらず、動本心なく、心

本動なし、動は心を離れず、心は動を離れず、動無なれば  
心離る、心無なれば動離る、動は是心の用用は是心の動  
動に即し用に即して動かす、用かす用の體本空、空本動  
なし、動用同じく心、心本動なし、故に經に云く、動にして  
而も所動なし、是故に終日見て而も曾て見ず、終日聞て  
而も曾て聞かず、終日覺て而も未だ嘗て覺らず、終日知  
て而も未だ曾て知らず、終日行坐して而も未だ行坐せ  
ず、終日噴喜して而も未だ曾て噴喜せずと。

【少室六門】

五種の法身

⑦ 問ふ、方廣經に云く、五種の法身とは、一には實相法身二  
には功德法身三には法性法身四には應化法身五には  
虚空法身と、自己の身に於て、何者か是なる、答ふ、心壞せ

佛の五眼

すと知る、これ實相法身なり、心萬像を含むと知る、これ  
功德法身なり、心無心なりと知る、これ法性法身なり、根  
に隨て應説する、これ應化法身なり、心形無ふして不可  
得なりと知る、これ虚空法身なり。  
⑧ 如來の五眼とは云何、答ふ、見色清淨なるを名て肉眼と  
爲す、見體清淨なるを名て天眼と爲す、諸色の境に於て  
乃至善惡悉く能く微細に分別して、染著する所なく、中  
に於て自在なるを慧眼と爲す、見に所見なきを名て法  
眼と爲す、見なく無見なきを名て佛眼と爲す。

【禪海探珠要訣集】

行道と法身

⑨ 佛の言く、今より已後、我諸の弟子相傳へて道を行せば、  
即ちこれ如來の法身常に世にありて滅せざるなり。

涅槃とは何ぞ

生死と涅槃

寂滅を樂とす

第六節 涅槃の意義

【遺教經】

① 涅槃とは涅槃は不生、涅槃は不死、生死を出離するを般涅槃と名く、心去來無れば即ち涅槃に入る、是に知る涅槃は即ち空心なるを、諸佛の涅槃に入ると云は、即ち是妄想無きの處なり。

【少室六門】

② 心もと心なし、境に因てあり、境もと境なし、心に因て現はる、心境交々妄にして、幻業を造成す、既に幻業あれば、生死を汲引す、今たに能くこの生死の妄を知る時は、則ち諸佛の涅槃も實に此を出でず。

【鼓山晚錄】

③ 諸の行は無常なり。是の生は滅するの法なり。生滅滅し已りて。寂滅なるを樂と爲す。

【涅槃經】

心相滅

④ 因縁俱に滅するを以ての故に、心相皆盡くるを涅槃を得と名く。

【圓覺經】

第一の法

⑤ 一切の法の中、涅槃を第一と爲す。

【般若經】

妄想滅其一

⑥ 我説く所の者は、妄想識滅を名けて涅槃と爲す。

【楞伽經】

涅槃の近因

⑦ 四法ありて涅槃の近因と爲る、一には善知識に近づき、二には正法を聽聞し、三には其義を思惟し、四には説の如く修行す、若し苦行を勤修して、これ涅槃の近因なり

【涅槃經】

涅槃の相

⑧ 我愛ある者は亦涅槃を愛す、我愛の根を伏するを涅槃の相と爲す。

【圓覺經】

涅槃は不死なり

⑨ 大慧涅槃は不壞不死なり、若し涅槃死ならば復生を受

涅槃に義あらす

妄想滅其二  
涅槃の八味

慈悲と涅槃

けて相續すべし、若し壞ならば、有爲の相に墮すべし、是故に涅槃は壞を離れ、死を離る、是故に修行者の歸依する所なり。

◎復次に太慧涅槃は捨にあらす、得にあらす、斷にあらす、常にあらす、一義にあらす、種々の義にあらす、と云ふ是を涅槃と名く。

◎妄想的識滅するを涅槃と名く。 【楞伽經】

◎善男子、譬へば甜酥八味具足するが如く、大般涅槃も亦復是の如し、八味具足す、如何なるをか八と爲すや、一に

は常二には恒三には安、四には清涼、五には不老、六には不死、七には無垢、八には快樂なり、是を八味と爲す。

◎如來の慈はこれ大法聚なり、この慈亦能く衆生を度す、

即ちこれ無上の眞解脱なり、解脱は即ちこれ大涅槃なり。

【涅槃經】

◎涅槃の樂とは、佛果の樂なり。 【妻鏡】

◎天真の佛智は本有なり、妄縁の生死は體空なり、二名ありと雖も、たゞこれ一義なり、只第一義諦を了せざるを

號して無名と曰ふ、不了の所盲に因て惑業の衆生となる、無明の實性を了すれば、涅槃の妙心となる。

【宗鏡錄】

◎涅槃といふは、阿耨多羅三藐三菩提なり、佛祖及び佛祖

の弟子の所住これなり。

◎生死は即ち涅槃なりと覺了すべし、いまだ生死のほか  
に涅槃を談ずるとなし。 【正法眼藏】

涅槃の樂  
無名と涅槃

佛祖の住所

生死と涅槃

涅槃は去來なし

⑥ 覺成就するが故に菩薩は法縛にあづからず、法脱をも求めず、生死をも厭はず、涅槃をも愛せず、持戒をも敬せず、毀戒をも憎まず、久習をも重んぜず、初學をも輕んぜず、何となれば一切は覺なるが故に、譬へば眼光の前境を曉了するに、其圓滿にして、憎愛なきが如し、これ光體無二なればなり、修もなく、成就もなく、圓覺普ねく照して、寂滅無二なり、離せず、即せず、縛もなく、脱もなし、何となれば、衆生は本來成佛せるものなればなり、故に生死と涅槃とは、昨夢に異ならず、生死と涅槃とは、昨夢の如くなるを以て、起もなく、滅もなく、來もなく、去もなし。

【圓覺經】

⑦ 龍泉文喜禪師、病の時、衆に示して曰く、三界の心は盡く

三界の心

生死海と涅槃

無煩惱

これ涅槃なり。

【古尊宿語錄】

⑧ 大圓覺を以て涅槃海と爲す、湛然寂然として、森羅萬象影其中に印す、而も忽然として境風の起るに及では、變じて生死海となり、識浪情波、日夜滔々として、一切衆生頭出頭沒して盡期あるとなし、二海異なるに似たれども、其實は同じく一心源より出づ、心源の中もと別相なく、生死涅槃齊しく濕性に歸す。

【正山廣錄】

⑨ 佛の言ふ所の如きは、諸の煩惱を滅するを名て涅槃と爲す、乃至諸有を離るゝを乃ち涅槃と名く、乃至、欲を離れて寂滅なるを名て涅槃と曰ふ、乃至善男子、彼の木を燃し已て灰あるが如く、煩惱滅し已て便ち涅槃あり。

【涅槃經】

佛性の二義

第七節 佛性の意義

- ① 佛の言く善根に二あり、一には常、二には無常、佛性は常にならず、無常にならず、是故に、不斷名て不二と爲す、一には善、二には不善、佛性は善にならず、不善にならず、是を不二と名く、蘊と界と凡夫は二と見、智者は其性無二と了達す、無二の性は即ちこれ佛性なり。【六祖壇經】
- ② 大凡、世間一切諸有の有情、王侯より庶人に到り、老幼尊卑、僧俗、男女、馬牛、犬豕、豺狼、麋鹿にいたるまで、正、因、佛性の大事を具足せずと云ふとなし。【辻談講】
- ③ 然れば、草木叢林の無常なる、即ち佛性なり、人物人心の無常なる、これ佛性なり。
- ④ 大涅槃これ無常なるが故に佛性なり。

悉く佛性を有す

佛性と無常

佛性と涅槃

人と佛性

生死と佛性

生死と佛性と無佛性

無佛性と成

- ⑤ 一切衆生即ち佛性と云はず、一切衆生有佛性と云ふと參學すべし。
- ⑥ 生を使得するに、生に停められず、死を使得するに、死に停められず、徒に生を愛するとなかれ、狼りに死を恐怖するとなかれ、既に佛性の所在なり、動著し、厭却するは外道なり。
- ⑦ 佛性は生の時のみありて、死の時はなかるべしと思ふ最も少聞薄解なり、生の時も有佛性なり、無佛性なり、死の時も有佛性なり、無佛性なり。
- ⑧ 無佛性の正當恁麼時、即ち作佛なり、無佛性未だ見聞せず、道取せざるは、未だ作佛せざるなり。【正法眼藏】

第七章 眞髓

第一節 序

一切皆平等

差別即平等の理

○生死と涅槃と異なるると云はば、本より二見なり、假令同じと云ふも、亦二見なり、同は異に依て立す、異なくんば何をか同と云はんや、纒に同と説かば、即ち異あり、異と同と分明にこれ二見なり、生死と涅槃と然あるが如く、衆生と佛とも亦復是の如し、只衆生と佛とのみにあらず、煩惱と菩提と善悪、邪正、賢愚、得失、有情、無情、色空、明暗、始終、成壞等の一切の二邊、悉く皆斯の如く、四句を離れ、百非を絶す。

法昌の遇禪師、僧に問ふ、一切の聲はこれ佛聲と是なり

【臨在家語】

や否や、師云く甚麼してか、鴉は鴉鳴を作し、鵲は鵲噪を作す、云く和尚自ら分別を生ず、師便ち打つ、又一僧に問ふ、一切の聲は佛聲と、是なりや否や、云く不是、師云く甚麼としてか、不是ある、云く鴉は鴉鳴を作し、鵲は鵲噪を作す、師亦打つ、後に一僧あり、問ふ前頭の僧の是と云ふは、且く從ふ、後頭の一僧の不是と云ふは、甚に因てか也、打つ、師打て云く、且く明眼の人に聽て斷じて看よ。

【禪林類聚】

不二に就ての注意

○師ある時云く、若し即心即佛と言はば、權りに且く奴を認て、郎と作すのみ、生死涅槃、恰も頭を斬て、活を覓むるに似たり、若し佛と説き、祖と説かば、佛意、祖意、大に木樓子を將て、爾が眼睫を換却するに似て相似たり。

眞偽超絶

④ 夾山會禪師の偈に云く。明々として悟法なし。悟法は即ち人を迷はす。長く兩脚を伸て睡れば。偽もな

【雲門廣錄】

【禪林類聚】

甘中に苦あり

⑤ 月は照し風は吹く何の所爲ぞ。長空萬古たゞ斯の如し。縁を除き物を除て終に法なく。意を去り死を去て始て詩あり。甘は苦中に發す茗を試すべし。酸は甜處に生ず飴を嘗むると莫れ。丹心一寸水よりも淡

【石山廣錄】

一切不二

⑥ 善男子、一切の障礙は即ち窮竟覺なり、得念も失念も解脫にあらざるとなし、成法も破法も皆涅槃と名く、智慧も愚痴も通じて般若たり、菩薩外道の成就する所の法

清淨と破戒とを論ぜず

⑦ 勅問の九に曰く、經に曰く、清淨の行者涅槃に入らず、破戒の比丘地獄に入らずと、清淨の行者は涅槃に入るべきに、什麼としてか入らざる、破戒の比丘は地獄に入るべきに、什麼としてか入らざる、師曰く、涅槃と地獄とに於て二見を存するは、小乗の見解なり、善惡不二邪正一如の處に於て、什麼の清淨と破戒とを論せんや、圓覺了義經に曰く、衆生の國土は同一法性、地獄天堂は皆な淨

【圓覺經】



法界平等

動靜不二

道心を要す

土たり、一切煩惱畢竟解脱云云と、然らば則ち涅槃の求むべきなく、地獄の厭ふべきなし、何ぞ清淨と破戒とを論せん。

【十種疑問奏答】

⑧ 我を取りわき、主にして、法界草木我身と同じものと信せぬはわろく候。

【廿三問答】

⑨ 明に見性し去らば、六塵即禪定、五欲即ち一乗にして、諸法實相なり、動靜不二の大禪定に入て、身心共に脱落す。

【卅庵假名法語】

⑩ 知るべし、古の溪山雲月は今の溪山雲月なり、古も眼横鼻直今も鼻直眼横、佛と云ひ祖と云ひ、自と云ひ、他と云ふとなかれ、何の處より恁麼にし來る、愧づべし、法に於て古今を隔つるとみなこれ汝が道心のうすきが故なり。

【西來法語】

一切空華の如し

小乗と大乘

⑪ 心主附與の寶劍を提て一氣に進み、佛に逢はば佛を殺し、祖に逢はば祖を殺し、父母に逢はば父母を殺し、衆生に逢はば衆生を殺し、乃至有情無情、森羅萬象、山河大地、三世十方、善惡是非、其外六根門題、七識街邊に出沒去來するもの、一切皆殺し盡して、大虚空界を翻身出頭せば、眞の大丈夫と謂つべし、這裡に到つて、諸佛衆生、菩提惱煩、生死涅槃、天道地獄、總に夢幻空華なるを疑はず。

【卅庵假名法語】

⑫ 小乗權教は、煩惱と菩薩と、生死と涅槃と、迷と悟と、皆各別なりと教ゆるが故に、生死煩惱の迷を厭ひ捨て、菩提涅槃の悟をねがひ得んと志すなり、今此に法華經に、

煩惱即菩提、生死即涅槃、迷悟一體、邪正不二と教ゆるとは、一切の法に於て分別の思を止めよと云ふことなり。

【枯木集】

佛堂に佛人なし

③ 平等の眞法界には、佛もなく衆生もなし、染淨の縁に隨て十法界を成ず、眞心隨縁して自性を守らざるを、只衆生自ら無性の性を知らざるが故に、たゞ染縁に隨へば凡となり、淨縁に隨へば聖となる、虚空の響の縁に任せて發する所の如し。

【宗鏡錄】

無明と佛

第二節 無明と佛陀

① 無明の心内別に諸佛の師あり、萬物遷變の處別に常住不凋の性ありと謂ふにはあらず、たゞ無明の心破るを得れば、諸佛の師自ら其中にあり、萬物遷變の處を見

得して分明なれば、當住不凋の性亦裏許にあり。

【大光明藏】

無明と涅槃

② 知見に知を立つるは即ち無明の本。知見に見なきはこれ即ち涅槃。

【見桃錄】

佛性の作用

第三節 身軀と佛陀

① 西天の異見王、波羅提尊者に問て云く、何者をかこれ佛尊者云く、見性これ佛、王云く、師見性すや否や、尊者云く、我佛性を見たり、王云く、性何れの所にか在る、尊者曰く、性は作用にあり、王云く、これ何の作用ぞ、我今見ず、尊者云く、今現に作用す、王自ら見ざるなり、王云く、若し用の時に當て幾處にか出現するや、尊者云く、若し出現する時當に其八あるべし、王云く、其八の出幻、我爲に説くべ

し、尊者偈を説て云く。胎に在ては身と曰ひ、世に處しては人と名く。眼に在りては香を嗅ぎ、舌に在りては談論聞と曰ふ。鼻に在りては香を嗅ぎ、舌に在りては談論し。手に在りては執捉し、足に在りては運奔す。偏く現して俱に沙界を該ね。收攝して一微塵に在り。識者はこれ佛性なることを知り。識らざる者は喚で精魂と作す。王聞て心に悟り禮を作して謝す。

【禪林類聚】

當成佛と已  
成佛  
凡夫と佛

○大衆諦かに信せよ。汝はこれ當に成るべきの佛にして。我はこれ已に成れるの佛なり。  
○佛と凡夫と兩人にあらず。今身即ちこれ本來の身。鐵摩拏を洗ふ心源の水。般若光を生ず性海の津。只

【梵網經】

だ迷に對するが爲に權に悟あり。如し能く妄を除かば別に眞なし。浮囊偏に要す護持の密なることを。念を失ふと沈溺の因に迷ふと莫れ。  
【正山廣錄】

第四節 煩惱と菩提

○煩惱涅槃に異なりと見ざる是を平等と名く、何を以ての故に、煩惱と涅槃と同じく、是一性空なるが故に、是を以て小乗の人は妄りに煩惱を斷じ妄りに涅槃に入て涅槃の爲に滯はざる菩薩は煩惱の性空なりと知りて即ち空を離れず、故に常に涅槃に在り。

○一切の煩惱如來の種子たり、煩惱に因て智慧を得るが爲なり、只煩惱如來を生ずと道べし、煩惱是如來なりと道とを得べからず、故に身心を田疇と爲し、煩惱を種子

煩惱即菩提

煩惱即佛

と爲し、智慧を萌芽と爲し、如來を穀に喩ふ、佛、心中に在ると香の樹中に在が如し、煩惱若盡れば佛心より出で、朽腐若盡れば香樹より出づ、即ち知る樹外に香なく、心に佛なきことを。

【少室六門】

③ 煩惱を斷せずして涅槃を得。

【維摩經】

④ 清淨の行者も涅槃に入らず、破戒の比丘も地獄に入らず。

【文珠所說般若經】

⑤ たい信心堅密にして、窮參して已まず、廓爾として開悟すれば、即ち其自己の現量一塵を隔てず、轉じて自覺の聖智と爲る、迷ふ時は金を認て銅と爲し、悟るときは、金にして銅にあらずと知るが如し、銅もと金なりと悟れば、乃ち自覺聖智なり、金に迷へ、銅を執するは、乃ち自己

煩惱と涅槃  
清淨と破戒

迷悟不二

無明と解脱

迷悟を分たす

念起と本心

の現量なり。

【東語西語】

⑥ 阿難、汝、俱生の無明、汝をして生死に輪轉せしむる結根を識知せんと欲せば、唯だ汝が六根なり、更に他物なし、汝復無上菩提の汝をして、安樂解脱寂靜妙常を證せしむるものを知らんと欲せば、亦汝が六根なり、更に他物にあらず。

【首楞嚴經】

⑦ 迷悟を分たす、凡聖を絶す。百歳の光陰春夢の中、春夢醒め來つて一事なし。桃花舊に依て面皮紅なり。

【見桃錄】

⑧ 念起はたとへ煩惱なりとも、本心の暫く姿を變へたるものにてこそあれ、念起となりたる後に、本心の動かずして、殘れるもの微塵ばかりもなきなり、故は瞋恚の念

業識と佛性

念慮と人佛

となる時は、身心世界一時に火宅の境界となり、慈悲の念となるときは、身心世界一時に淨佛國土なり。

⑨ 狗子にありては業識の性なれども、其業識の性が直に如來にありては佛性と名くるなり、故に情識意量の迷より見れば、如來萬徳の境界も生死流轉の如くに思はれ、佛知見を開發して照せば、六道輪廻の衆生も如來常住の法身なり、煩惱即菩提、生死即涅槃と説かるゝともこの意なり、盡界に客塵なし、直下第二人あらずと永平高祖は宣へり。

⑩ 凡夫は即ち佛煩惱は即ち菩提、前念迷へば即ち凡夫、後念悟れば即ち佛、前念境に著すれば即ち煩惱、後念境を離るれば即ち菩提。

【六祖壇經】

澁柿と柿餅

① 衆生の三毒は澁柿なり、如來の三徳は柿餅なり、澁柿のまゝにて置けば腐爛て棄る故に、其を皮むきて、意をつけて日々乾し、雨のかゝらぬやうに用心して、毎日々々出し入に念を入れて程よき様にほし揚れば、妙味の柿餅となる、故に甘味となりて後に再び澁味に還る道理はなし、我等が三毒も其まゝにて置けば、煩惱にたいて、三惡道に落ちて棄たる、其を煩惱の皮むきのけて佛の慧日にあて、乾かして魔業の雨のかゝらぬやうに時々、日々、月々、年々、生々、世々出し入れて、念入れて如法につとめて、窮竟に至れば、甘露の三徳三身の境界となりて、もとの澁味の三毒にかへるとはなきなり、金銀の土石の中より出で、絢り鍊りして後は再び石土にな

迷ふ人なく  
悟る法なし

凡聖不二

らざる道理にも似たり、是をさへ得と合點すれば、煩惱  
即菩提の妙旨がいよく明白なり。【説戒】

③一人として迷ふ人なく、一法として悟るべき法なし、是  
故に迷を轉じて悟となし、凡を轉じて聖となすと云ふ  
も、悉くみな未悟の人の言なり、更に何の凡の轉ずべき  
かあらん、何の迷の悟るべきかあらん。【傳光錄】

第五節 凡夫と聖人

①問ふ、聖人の無心は即ちこれ佛、凡夫の無心は空寂に沈  
むとなきや、否や、師云く、法に凡聖なく亦沈寂なし、法も  
と有ならず、無の見を作すなかれ、法もと無ならず、有の  
見をなすなかれ、有と無とは盡くこれ情見なり、なほ幻  
翳の如し、所以に云く見聞は幻翳の如し、知覺は乃ち衆

生佛不二

月と曇

水と波

生と、祖師の門中、只息機忘見を論ず、所以に機を忘れず  
ば、則ち佛道隆へ、分別すれば、則ち魔軍熾なり。【宛陵錄】

宛陵錄

②善男子、慈とは乃ちこれ不可思議なり、諸佛の境界も不  
可思議なり、諸佛の境界は即ちこれ慈なり、富に知るべ  
し、慈とは即ちこれ如來なり、善男子、慈とは即ちこれ衆  
生の佛性なり。【涅槃經】

涅槃經

③佛の心も我等衆生を離れず、たとへば月は佛の如し、曇  
りは衆生の如し、曇れども根本月はくからず、又佛は  
鏡の如し、映る影は衆生に似たり、鏡に映れども根本鏡  
は物を嫌はず、されば火うつれども鏡焼けず、水うつれ  
ども鏡ぬれず、又佛は水の如し、波は衆生に似たり、波た

てども水は元の水にてかはらず、又心は實の佛なり、念の起るは衆生なり、念なければ心懸て佛なり、曇なければ月明なり、向ふものなければ鏡に影もなし、波なければ水は元の水なるが如し、念なくば衆生たゞ佛なるべきを妄念さまぐある故に様々のいやしき形となるなり。

【廿三問答】

④ 生佛異見を生じ、自他憎愛を作して、取捨するは佛弟子の用心にあらず、差別の揀擇心なく、平等の慈悲心あるを眞の佛子と云ふ。

【供養參】

⑤ 諸佛は心を悟り、衆生は心に迷ふ、生佛源は一にして、迷悟の境分る、他力を假らず、自心能く知る、佛果に至らんと欲せば、須く自心に參すべし。

【龍門夜話】

眞の佛子

自心に參す

法に差別なし

佛は衆生の用

體用不二

⑥ 僧あり、馬祖に問ふ、如何なるか、これ佛師、即心是佛と云ふ、故に其所以を觀すれば、即ち知りぬ、衆生本來成佛して、高下あるとなきとを、其高下は人に在て法にあらざるなり。

【大慧武庫】

⑦ 譬へば、一口の中、氣を呵する時は、煖に、氣を吹くときは、冷なり、豈兩氣あらんや、佛は衆生の用、衆生は佛の體、凡聖の轉換たゞ手を翻覆するに在のみ。

【大光明藏】

第六節 本體と作用

① 火は熱を以て體と爲し、明を以て用と爲す、火は手を炙て熱すべく、把玩すべからず、火は能く諸物を化すれども、物の爲に化せられず、火は能く諸の大種に入れども、大種の爲に攝せられず、是故に火の體は即ち火の用火

佛國と地獄

第七節 清淨と汚穢

の用は即ち火の體なり、これ道も亦然り、道能く煩惱の薪を火けども薪の爲に燃せられず、能く無明の暗夜を破れども夜の爲に奪はれず、能く分別の諸劫を灰すれども劫の爲に遷されず、能く惑習の世間を焼けども世の爲に變せられず、道の用此の如し、體も亦之の如し。

【天光明藏】

淨穢不二

○妄想無き時は一心是一佛國、妄想ある時は、一心是地獄なり、衆生は妄想を作して心を以て心を生ずるが故に常に地獄に在り、菩薩は妄想を觀察して心を以て心を生ぜざるが故に常に佛國に在り。

【少室六門】

其二

○舍利弗言く、我此土を見るに丘陵坑坎、荆棘沙磔、土石諸山、穢惡充滿す、螺髻梵王言く、仁者心に高下あり、佛慧に依らざるが故に、此土を見て不淨と爲すのみ、舍利弗、菩薩は一切衆生に於て悉皆平等なり、深心清淨佛にして、佛智慧によれば、則能く此佛土の清淨を見ん。

【少室六門】

三毒と佛陀

第八節 迷惑と佛陀

○三界とは貪瞋癡是なり、貪瞋癡を返して戒定慧と爲すを、即ち三界を超ゆと名く、然れども貪瞋癡も亦實性無



生死と涅槃

惑智不二

其一

其二

し、但衆生に據て言ふのみ、能く返照し了々として見れば、貧瞋癡の性即ち是佛性なり、貪瞋癡の外更に別に佛性あると無し。經に云く、諸佛從本來常に三毒に處して白法を長養して世尊と成ると。

【少室六門】

② 當に知るべし、生死と及涅槃と起なく滅なし、來なく去なし、其證する所の者得なく失なく、取なく捨なし、其の能く證する者も、作なく止なく住なし滅なし、此の證の中に於て、能なく所なく、畢竟して證もなく、亦證する者もなし、一切の法性平等にして不壞なり。

【圓覺經】

【寶積經】

③ 貪を供養するは即ち如來を供養するなり、瞋痴も亦復然り。

④ 佛は増上慢の人の爲に、姪怒痴を離るゝを解脱となす

無明と本覺の性

心外無法

と説くのみ若し増上慢なきの人には、佛、姪怒痴の性即ちこれ解脱なりと説く。

【維摩經】

【慈明語錄】

第九節 精神と佛陀

① 目に色を見るも、耳に聲をきくも、鼻に香をかぐも、口に物を言ふも、手を動かし、足をはたらかすも、一心の用にあらずと云ふとなし、此心を離れて外に向ひて佛を求

即心是佛の方便

心外に佛なし

め、法を求むるを迷の衆生と名けたり。

【拔隊假名法語】

② 西天の諸祖は無心これ佛と云ふ、江西の馬祖は即心是佛と云ふ、即心是佛と道ふと雖も、これ心猿意馬即佛と道ふにはあらず、近代の學人、多少錯會して或は道ふ、一たび即心是佛に歸すれば、第二世なしと、恁麼に會せば、即ち斷見の外道に同じ、良久して曰く、即心即佛何の宗旨ぞ、兒の啼を制せんと欲して一拳を打す。

【永平廣錄】

③ 夫れ法を求むる所なかるべし、心の外に別の佛なく、佛の外に別の心なし、善をも取らず、惡をも爲さず、淨穢の兩邊俱に依らず、自性なく、三界唯心なり。

衆生と佛

佛性と迷情

砂は飯とならず

本來佛

④ 心能く佛と作り、心衆生となる、眞心を了するを以ての故に成佛し、妄心を執するを以ての故に衆生となる。

【宗鏡錄】

⑤ 一切衆生は、本より佛性を備て、且くも去るとなれば、妄念の雲厚く隔てられて、心性の月を顯はすとなくれば、常没の凡夫たりと思へり。

【妻鏡】

⑥ 名相に貪着して、心の外に佛を求め、法を求めて成佛せんと欲せば、いさを蒸して、飯となさんと欲するが如し。

【鹽山和泥合水集】

⑦ 汝即ち本來の佛なり、誤つて凡夫の思をなす、たとへば舟に乗る時、岸の行くとみる、此見ゆる草木共に行くとみる、もと、岸は行かず、舟行くと悟る時、一切の疑一度に

心佛不二

開く。

⑧ 自心は是菩提なり、自心は是涅槃なり、若心の外に佛及び菩提の得べきありと言は、是處あると無し、佛及び菩提皆何の處にか在る、譬ば人あり手を以て虚空を捉へんとするが如き得べきや否や、虚空は但名のみありて相貌なし、取ると得ず、捨るとを得ず、是空を捉ると得ざるなり、此心を除て外に佛を覓むるとも終に得ざるなり、佛は是自心の作得なり、何に因てか此心を離れて外に佛を覓めん、前佛後佛は只是其心を言ふなり、心は即ち是佛なり、佛は即ち是心なり、心の外に佛無く、佛の外に心無し、若心の外に佛ありと言は、佛は何の處にかある、心の外に既に佛無し、何ぞ佛見を起して遮ひに

【大道假名法語】

相誑惑するや。

【少室六門】

佛種と煩惱

第十節 佛種と煩惱

① 維摩詰文殊師利に問ふ、何等をか如來の種となす、文殊師利言く、有身を種と爲し、無明有愛を種となす、貪恚癡を種となし、四顛倒を種となし、五蓋を種となし、六入を種となし、七識を種となし、八邪法を種となし、九煩惱を種となす、十不善道を種となす、要を以て之を言へば、六十二見及一切の煩惱みなこれ佛種なり、曰く、何の謂ぞや、答て曰く、若し無爲を見て正位に入る者は、復阿耨多羅三藐三菩提心を發すると能はず、譬へは高原陸地に蓮華を生せず、卑濕游泥に此華を生ずるが如し、是の如く無意の法を見て、正位に入る者は、終にまた能く佛法

を生せず、煩惱の泥中に乃ち衆生ありて、佛法を起すの  
み、また種を空に植ゆれば、終に生ずると能はず、糞壤の  
地に乃ち能く滋茂するが如し、是の如く無爲の正位に  
入る者は佛法を生せず、我見を起すと須彌山の如くな  
るもなほ能く阿耨多羅三藐三菩提心を發して佛法を  
生ず、是故に當に知るべし、一切の煩惱を如來の種とな  
すことを、巨海に下らざれば無價の寶珠を得ると能はず  
るが如し、是の如く煩惱の大海に入らざれば、一切の智  
寶を得ると能はずるなり。

【維摩經】

第十一節 戒定慧一體

○問ふ、三學等しく用ゆると、何者か三學なる、云何がこれ等  
しく用ゆる、答ふ、三學とは戒定慧これなり、問ふ、其義云

戒定慧の體  
は一なり

我に閑家具  
なし

何んがこれ戒定慧なる、答ふ、清淨無染なるはこれ戒な  
り、心不動なることを知て、境に對して寂然たるはこれ定  
なり、心不動なることを知るとき、不動の想を生せず、心清  
淨なることを知る時、清淨の想を生せず、乃至善惡みな能  
く分別して、中に於て染なく自在を得る者、是を名て慧  
と爲す、若し戒定慧の體俱に不可得なりと知るとき、即  
ち分別なければ、即ち同一體なり、是を三學等しく用ゆ  
と名く。

【禪海探珠要訣集】

○李刺史、藥山に問ふ、如何なるかこれ戒定慧、師云く、貧道  
が這裏には此閑家具なし、李云く、玄旨を測ると莫し、師  
云く、此の事を保任するを得んと欲せば、直に須く高  
高たる山頂に坐し、深々たる海底に向て行くべし。

【禪林類聚】

三世の有無

第十二節 三世は一如

○夫れ實際の理地は廻に凡聖を絶す之を悟るときは生なく死なく地獄なく天堂なく過去現在未來あるとなし之に迷ふときは生あり死あり地獄あり天堂あり過去あり現在あり未來あり已に三世あるときは善惡報應の其人に於ける升沈苦樂得て遁るべからざるなり。

【幽谷餘韻】

三世は一如

○佛法の中には生即ち不生と云ふ滅もひと時の位にて未だ前あり後あり此によりて滅即ち不滅と云ふ生と云ふ時には生よりほかにものなく滅と云ふ時には滅のほかにものなしかるが故に生來らば只これ生滅來らば滅に向ひてつかふべしといふと勿れ願ふとなかれこの生死は即ち佛の御生命なり。

【正法眼藏】

第十三節 身體と精神

身心一如

○心は海水の如く身は波浪の如し海水の外一點の波なきが如く波浪の外一滴の水なきが如し水波別なく動靜異ならず故に云ふ生死去來は眞實の人四大五蘊は不壞の身と。

【坐禪用心記】

其二

○佛法には固より身心一如にして性相不二なりと談する西天東地同じく知れる所敢て違ふべからず。

其三

○心は身を離れて常住なりと領解するを以て生死を離れたる佛智に妄計すと云ふともこの領解知覺の心は即ち猶生滅して全く常住ならずこれはかなきにあらず

因果不二

定力と變化

大器晩成

すや、嘗觀すべし。

【正法眼藏】

第十四節 原因と結果

○因は前果は後なるにあらざれども、因圓滿し、果圓滿す、因等果等法等なり、因にまたれて果感すと雖も、前後に

○大凡變化は皆定力より起る、羅漢に神通あり、菩薩に神

通ある者は、小乘偏に定力を修するが故に、神通發し易し、大乘は普く智慧方便を修するが故に、定力熟し難し、大器は晩く成る其器を成すに至りては故より餘乗の境界に非ず、日下の孤燈果然として照を失す、譬ば草木の先最極成熟の果を把り來て、地に下して始て萌芽を生ずるが如し、是故に因果に異らず、果因に異らず、因若

教と行と證の一致

第十五節 教行證一如

○所謂佛家の體爲は、宗と説と行と一等なり、一如なり、宗は證なり、説は教なり、行は修なり、向來共に學習を存す、應に知るべし、行は宗説を行するなり、説は宗行を説くなり、宗は説行を證するなり、行もし説を行せず、證を行せずんば、何ぞ佛法を行すと云はん、説もし行を説かず、證を説かずんば、佛法を説くと稱し難し、證若し行を證せず、説を證せずんば、争か佛法を證すと名けん、當に知

【宗門無盡燈論】

修證一如

るべし佛法は初中後一なり、初中後善なり、初中後無なり、初中後空なり。

【永平家訓】

② それ修證はひとつにあらずとおもへるは、即ち外道の見なり、佛法には修證これ一等なり、いまも證上の修なる故に初心の辨道即ち本證の全體なり、かるがゆるるに、修行の用心をさぶくるにも、修のほかに證をまつとなかれと教ふ直指の本證なるが故なるべし、すでに修の證なれば證にきはなく、證の修なれば修にはじめなし。③ 妙修を放下すれば、本證手の中にみたり、本證を出身すれば、妙修通身におこなはる。

【正法眼藏】

色空同一

① 迷ふ時は空を以て色となし、悟れば即ち色を以て空となす、迷悟もと差別なく、色空窮竟して還て同じ。

第十六節 其他の一如

【禪海探珠要訣集】

自他不二

② 佛法にも自他を談ず、たゞし凡夫は自他に迷ふ故に自他を立つ、佛は自他といへども其理一なりと體脱す。

【禪戒鈔】

有無不二

③ 真空は有を壊せず、真空は色に異ならず。

【雲門廣錄】

常と無常

④ 古今教禪の人師等は常無常等の文字に轉却せらる、故に如來の深意に通せず、實に無常の無常たることを知る時は、則ち無常即ち眞常の法なり、實に生滅の生滅たることを知るときは、即ち生滅直にこれ不生滅なり。

【諸法實相】

心境一如

⑤ 心と説き境と説き、煩惱菩提と説くとも、悉くこれ自己

の異名なり。

【傳光錄】

第八章 雜篇

徹底

如何にせば  
佛道に通達  
せん

○山に登らば、須く頂に到るべし。海に入らば、須く底に到るべし。山に登りて頂に到らざれば、宇宙の寛廣を知らず。海に入りて底に到らざれば、滄溟の淺深を知らず。既に寛廣を知り、又淺深を知れば、一踢に四大海を蹋翻し、一推に須彌上を推倒せん。

【永平家訓】

○文珠師利維摩詰に問て言く、菩薩云何が佛道に通達せん。維摩詰言く、若し菩薩非道を行せば、是を佛道に通達すと爲す。又問ふ云何が菩薩非道を行すべき。答て曰く、若し菩薩五無間を行して惱患なく、地獄に至るも諸の

西方十萬億  
土の意義

罪垢なく、畜生に至るも無明憍慢等の過なく、餓鬼に至るも功德を具足し、色無色界の道を行ずるも、以て勝れたりと爲さず。貪欲を行ふと示して、諸の染着を離れ、瞋恚を行ふと示して、諸の衆生に於て瞋癡あるとなす。愚癡を行ふと示して、而も智慧を以て其心を調伏す。慳貪を行ふと示して、而も内外の所有を捨て、身命を惜まず、毀禁を行ふと示して、淨戒に安住し、乃至小罪にもなほ大懼を懷く。瞋恚を行ふと示して、而も常に慈忍あり、懈怠を行ふと示して、而も功德を勤修す云云。

【維摩經】

○西方と云ふは、衆生の心地なり。十萬億の佛土をすぐると云ふは、衆生の十惡の念をやむると、菩薩の十地の階



心は何處に置くべきか

級を超ゆるとなり、阿彌陀とは、衆生の佛性なり、觀音勢至等の聖聚とは、自性の妙用なり。【鹽山和泥合水集】

④ 心を何處に置かうぞ、敵の身の働きに心を置けば、敵の身の働きに心を取らるゝなり、敵の太刀に心を置けば、敵の太刀に心を取らるゝなり、敵の太刀に心を取らるゝなり、敵を切らんと思ふ所に心を置けば、敵を切らんと思ふ所に心を置けば、敵を切らんと思ふ所に心を置けば、我が太刀に心を取らるゝなり、我が太刀に心を置けば、我が太刀に心を取らるゝなり、我が切られじと思ふ所に心を置けば、切られじと思ふ所に心を取らるゝなり、人の構に心を置けば、人の構に心を取らるゝなり、人の構に心を置けば、人の構に心を取らるゝなり、心を取らるゝなり、心を眼に置けば、眼に取られて、身の用欠け申候、右の足に心を置けば、右の足に心を取られて、身の用欠くるなり、何處なりとも、一所に心を置けば、餘

無念とは何ぞ  
佛祖の用心

の方の用は皆欠くるなり、然らば則ち心を何處に置くべきぞ、我答て曰く、何處にも置かねば、我が身一パイに行わたりて、全體に延びひろがりてある程に、手の入る時は、手の用を叶へ、足の入る時は、足の用を叶へ、目の入る時は、目の用を叶へ、其入る所々に行わたりてある程に、其入る所々の用を叶ふるなり、萬一もし一所に定めて心を置くなれば、一所に取られて用は欠くべきなり。

【不動智神妙錄】

⑤ 常に何も思はぬは、佛の稽古なり、何も思はぬ物から、何もかもするがよし。生きながら死人と成てなり、果てて、思ひの儘にする業ぞよき。

【無難假名法語】

⑥ 只能く今日五蘊假和合の身相は、靈光朝露の境界なり

淺間しき智  
者の病氣

と觀念し、夢幻泡影の起滅なりと照見し、本然自性本空の自心と開悟して、一切諸法のために惑亂動轉するとなきを佛々祖々の用心とす。【供養參】

⑦世に智慧ある人の病中ほど淺ましく、物若きとはなきとなるぞや、智慧あるまゝに、來し方行末等のことも際限もなく思ひ續け、看病の人の好惡を咎め、舊識同伴の間闊を恨み、生前には名聞の遂げざるを愁ひ、死後は長夜の苦患を恐れ、郷里を思ひては羽幹の生せざるを憤り、神明に祈りては感應のおそきを瞋り、目を打ち寒ざりて臥居たるは、殊勝に物靜なれども、胸中は九國の合戦よりも騒しく、心上は三塗の衆生よりも苦し、三合の病に八石五斗の物思ひなるべし。【遠羅天釜】

三種の神通

⑧神通に大約三あり、一には報得、一には修得、一には證得

悟無執看と實

なり、報得とは、福業自ら致す、諸天の如く皆能く徹視徹聽す、修得とは、習學して成ず、提婆達多が神通を、阿難尊に學びしが如きもの是なり、證得とは、心を專にして道を學び、無心にして通を學ぶ、道具つて通自ら具す、たゞ遅速同じからざるのみ、古今の諸祖諸善知識の如き是なり、較々之を論ずれば、道を得るとは通なきを患へず、通を得るとは未だ必ずしも道あらず。【竹窓隨筆】

⑨若し天下の富貴を視ると糞土の如く、男女の殊色を視ると臭骸の如く、令聞廣譽を聽くと谷響の如く、惡言毀謗を聽くと鳥韻の如く、且く自己を以て臘扇となし、萬物を以て芻狗となし、而して後斷々として參取し去る

ときは、所悟虚しからず、若し視聽未だ此の如くならずして、實參實悟すと言ふときは、所謂大妄語成て、無間獄に墮するものなり。

【名山廣錄】

⑤ 一には久しく坐す、二には食を節せず、三には憂愁多く、四には疲極、五には淫欲、六には瞋恚、七には大便を忍び、八には小便を忍び、九には上風を制し、十には下風を制す。

【佛說醫經】

⑥ 或人問ふ、某甲さきに淨土を修す、禪者あり曰く、たゞ自佛已に即すと悟らば、何ぞ必ずしも外に他佛を求めて往生を願はんと、此意は何如、予謂く、これ實に最上の開示なり、たゞ之を執るに亦能く誤あり、謂ふ喩を以て明さん、人あり、穎悟顔子に同じく、而して百里千里の外に聖

病を得るの  
十原因

悟と往來

離言の道

美惡と念慮

夫子の如き者ありて、道を其間に倡へば、七十子、三千賢相ともに周旋せん、汝其名を聞て往て之に見へば、未だ必ずしも更に長處あらずんばあらず、而るに自ら穎悟を恃で、拒で觀謁せずして可ならんか、然りと雖も、悟を得て往生を願はざるとは、老兄の未だ悟らざるとあらんとを敢保す。

【竹窓隨筆】

③ 離言の道の要は、自ら肯ふに在り、佗に由て悟らず、此の如く發明するを、方に無量劫來の生死の根本に了達すと名く、若し離言の道を見得すれば、即ち一切の聲色、言語、是非更に別法なきを見ん。

【羅湖野錄】

③ 美惡は躰なし、念に因て持する所なり、聲響冥合し、形影相隨ふ。

【註心賦】

無性の禪

④ 禪は即ちこれ動なり、不動不禪はこれ無性の禪なり。

【禪源諸詮集】

禪僧の行狀  
見解

⑤ 禪僧の行解に十あり、一には了々に性を見るとき、晝色を觀るが如し、二には縁に逢ひ境に對して、色を見、聲を聞て、舉足下足、開眼合眼に悉く宗を明むるを得て、道と相應す、三には一代の時教及從上祖師の言句を覽て、深きを聞て怖れず、みな諦了を得て疑なし、四には差別の問難の種々の詰責に因て、能く他疑を斷ず、五には一切の時、一切處に於て智照滯りなく、一法として能く障礙を爲すとを見ず、六には逆順の境に於て、盡く識りて破るを得、七には心境起る時、起處を了知して、生死の根塵の爲に惑はされず、八には行住坐臥の四威儀の中に、欽

人間  
の四病

承祇對著衣、喫飯、道と相應す、九には有佛、無佛、有無衆生を説くを聞て、或は讚じ、或は毀んに、一心動せず、十には差別智に於て皆能く明達し、性相俱に通じ、理事滯りなく、一法として其原を鑒みざるゝあるとなし。

【宗鏡錄】

安眠の原因

⑥ 一切衆生に四の毒箭ありて、則ち病因となる、何等をか四と爲す、貪欲、瞋恚、愚痴、憍慢なり、若し病因あれば、則ち病生ずるとあり、所謂寒熱病、上氣、吐逆、膚體癢々、其心悶亂し、下痢し、噦咽し、小便淋瀝し、眼耳疼痛し、腹背脹滿し、顛倒乾消し、鬼魅に著さる。

⑦ 身に諸の惡業なく、口に惡を離れ、心に疑網あることなく、乃ち安穩に眠るとを得ん、乃至心に取著あること

初心しよしんの坐禪ざぜん

なく、諸もろの怨讐おんしうを遠離おんりして、常に和わして諍訟せうしやうなくんば、乃すなはち安穩あんおんに眠ねむることを得えん、乃至なほ、若もし惡業あくごふを造つくらず、心こころにつねに慚愧ぜんきを懷いだき、惡あくは果報くわはうありと信しんせば、乃すなはち安穩あんおんに眠ねむることを得えん、乃至なほ、父母ふぼを敬養けいやうし、一の生命せいめいを害がいせず、他の財物ざいぶつを盜ぬすまざれば、乃すなはち安穩あんおんに眠ねむることを得えん。

【涅槃經】

佛ほとけとなる方ほう

④ 初心しよしんの坐禪ざぜんの時ときは、必ず昏亂こんらんするにあり、是これは坐禪ざぜんに打うち向むかふ時ときに起おこるなり、必ずしもわざと坐禪ざぜんをばせずとも、坐ざの見聞けんもん覺知かくちたゞ尋常じんじやうにかはるとなく、靜しやうかにうちゐたるばかりにて、道みちに向むかふと勿なれ、昏亂こんらんは凡すべて來きたらぬなり。

【大智度論】

⑤ 成佛じゆつぼうの望のぞみあらん人ひとは、佛ほとけになるべき主しを知るべし、此この主し

身心しんじん脱落だつらく

眞正しんせいの見解けんげを要えす

を知らんと思おもは、只ただ今いまの一念ねんの下もとについて尋たづぬべし、一切いっせの善惡ぜんあくを念おもひ、色いろを見み、聲こゑを聞きく物ものは何物なにものぞと自ら深ふかく疑うたげらば、必ず悟さとるなり、悟さとれば、則すなはち佛ほとけなり、佛ほとけの悟さとる悟さとりは、一切いっせ衆生しゆじやうの一心しんなり。

【拔除假名法語】

⑥ 身心しんじん脱落だつらくとは坐禪ざぜんなり、祇管しきくわん打坐だざの時とき、五欲ごよくを離はなれ、五益ごえきを除のぞく。

【寶慶記】

⑦ 若もし人ひと佛ほとけを求もとめば、是人このひと佛ほとけを失うしなひ、若もし人ひと、道みちを求もとめば、是人このひと、道みちを失うしなふ、若もし人ひと、祖そを求もとめば、是人このひと、祖そを失うしなふ、大德だいとく錯あやまる、と莫なれ、我われは且しから、爾なんぢが經論きやうろんを解げする、とを取とらず、我われ亦また爾なんぢが國王こくわう大臣だいじんたる、とを取とらず、我われ亦また爾なんぢが辯懸河べんけんがに似にたる、とを取とらず、我われ亦また爾なんぢが聰明智慧そうめいちゑを取とらず、我われ亦また爾なんぢが眞正しんせいの見解けんげを要えす。

【臨濟慧照語錄】

大機大用とは何ぞ

③ 心が外に出で、善をなさんも悪をなさんも、此機にありこの機に善悪も、治らんも亂れんも、兵法の勝敗も、身をもたんも、身をはたさんも、手をあげ、手を開き、太刀をあげ、身を開き、飛びあがり、走りかゝり、様々のはたらきも、此機より出で、外にはたらくものなり、大機大用とはこのことなり。

【澤庵假名法語】

世のありさま

④ 世は實なきあだしの、後はあとなきものなるを、迷は人の心にて、親みあり疎きあり、愛するからにまた悪む、昨日の雨を今日は風にきくなれば、何をか誠とも、何をか偽りと云ふべき、凡そ世の中のと、求め願ふとはかなはず、うとみ嫌ふとは、日々に見へ、耳に聞こへ、昨日も今日も、これぞと悦ぶとはまれにて、明日はと思へど、

信と疑と悟

明日も同じ世の同じ人なれば、心にそまぬ同じうるさき事のみ出で来て、是までと云ふ限は知られず、山には山の苦みあり、海には海の苦みあり、天地の大なるも、終に亡ぶ時あり、まして山の高きは崩れ、海の深きはかわき、定めがたく、實なきは、世のありさまなり。

【指月法語】

⑤ 信十分あれば疑も十分あり、疑十分あれば悟も十分あり、將に平生の所見、所聞、悪知、悪解、奇言、妙句、禪道、佛法、貢高、我慢等の心を以て、徹底傾寫すべし、只未明了の公案上に就て、脚頭を距定し、脊梁を堅起して、晝夜を分つとなく、直に東西辨せず、南北分たざるとを得て、有氣的の死人の如く相似て、心境に隨て觸着すれば、還て知る

法ほふを聞きくに  
三種しゆの法ほふあり

佛ほとけを發はつ見けんす  
方ほう法ほふ

自然じねんに念慮ねんりよ内に忘ぼうじ、心識しんしき路絶ろぜつして、忽然とつねんとして、獨體どくたいを打破だいはせん、元來げんらい他たより得えず、那時なじあに平生へいせいを慶快けいがいせざるものあらんや。

【願庵語錄】

夫それ問法もんほふに上中下じやうちうげの三般さんはんあり、上士じやうしの聽法ちやうほふは神しんを以もつて聽きき、中士ちゆうしの聽法ちゆうほふは心しんを以もつて聽きき、下士げしの聽法ちゆうほふは耳みみを以もつて聽きく、我等われら既にすでに神心しんしん耳じあり、且しかもく作麼生そまさんか聽法ちゆうほふせん。

【永平廣錄】

問とふ云いか何かんがこれ佛ほとけの眞身しんしんを見みん、答こたふ、有無うむを見みざるは即すなはちこれ佛ほとけの眞身しんしんを見みるなり、問とふ、云いか何かんぞ有無うむを見みざる、即すなはちこれ見佛けんぶつ眞身しんしんなる、答こたふ、有無うむに因よつて立たち、無むは有うに因よつて顯あはる、もと有うを立たてざれば無むも亦また存ぞんせず、既にすでに無むを存ぞんせずんば、有無うむれよりしてか得えん、有うと無む

と相因あひあつて有うなるが如ごとし、既にすでに相因あひあつて有うなれば、悉ことごとく生滅しやうめつなり、たゞ此二見このけんを離はなる、即すなはちこれ見佛けんぶつ眞身しんしんなり。

【禪海探珠要訣集】

未いまだ本心ほんしんを知らざる、しばらく俗事ぞくじと云いふ、既にすでに本心ほんしんを明あきらめ得うるを是こゝを佛事ぶつじと名なく。

【傳光錄】

古いにしへに稱しやうする所ところの道人だうじんは、世よの重おもんずる所ところの者ものを以もつて彼かれ之これを輕かろんず、世よの輕かろんずる者もの、彼かれ之これを重おもんずるが故ゆゑなり、世よの重おもんずる所ところの者ものは何なんぞ、富貴ふうきなり、世よの輕かろんずる所ところの者ものは何なんぞ、身心しんしんなり、今世いまよと其重輕そのちゆうけいを同おなじふす、これ道人だうじんたるを得えんや。

【竹窓隨筆】

學道がくだうに肝要かんえう三あり、第一だいいちに生死事大しやうじじだいの爲ためにする心切こころせつなるべし、第二だいいちに世間虛妄せけんこきやう得失とくしつ等の相すがたを識破しきはすべし、第三

學道がくだうの三要えう

俗事ぞくじと佛事ぶつじ

道人だうじんとは何なん

道とは如何

獸類の愛

自律的救済

に一片長遠決定の心を起し、永く退轉せざるべし、此三若し其一を欠く時は廢す、其二を欠く時は失す、三のもの共に欠く時は、喩ひ一代藏經に通じ、百家の書を読むとも、只業識を助け、高慢を長じて、少しも吾身の補ひになるべからず。

◎世間の中に有りとあらゆる處の物は皆これ道なり、道と心と二にあらず、心即ちこれ道、道即ちこれ心なり。

【大應假名法語】

◎狼は子を哀むに因て腸を斷ち、虎は數々頭を回して子を顧みる、それ子を愛するの情、あに男女を擇ぶあらんや。

【禪餘外集】

◎今日吾等が坐禪して思量分別の及ばぬ境界なる所に

眼を開て、念々起滅の間を照して、取捨憎愛の造作を離れたるを、如來にありては、大光明を放て、十方世界を照して、一切衆生を度脱し玉ふと云ふなり。

【自受用三昧】

◎若し生死到來して、自在無礙なるを得んと要せば、爾か意識裡の寶惜する所を把て、一時に放下して、空蕩々々虚豁々の處に向て、更に精彩を著て、當下に古今を裂破し、乾坤を蹈翻して、當に始て穩座を得べし。

【龍門夜語】

◎用心とは何ぞ必ずしも他の律あらん。須く識るべし、人々所知を障るゝとを。只冷灰堆裏に向て坐せよ。一面豆爆すこれ投機。

【栗棘蓬】



戒定慧及悲願

念佛と彌陀

◎佛法本二法なし、能く宗意を窮むる者は、到らざると無く、自在ならざると無し、若名位を以て強て之を論ずる時は、持戒苦行一切有爲の善根は、猶始て邊鄙の郷を出るが如し、定慧の資なくんば、又山野に迷はん、衣食ある時は、遊觀して以て樂み、福力盡くる時は、卻て飢寒に迫る、人天の勝報是此を出でず、禪定智慧は、道路に進むが如し、若悲願なくんば、又旅館に止る。

◎念とは無念を以て念と云ひ、佛とは心佛を以て佛と云ふ、又曰く、凡そ極樂とは、色の異名なり、尙色として見るべき無し、彌陀とは、心の異名なり、何ぞ心として尋ねべきあらん、然るに極樂と彌陀と實に外境に非ず、即ち己心に在り、經に曰く、此を去ると遠からず、乃至是心是佛

謙遜と沈黙

悪智識の害

◎夫れ謙は美德なり、謙を過す者は、多く詐を懐く、黙は懿行なり、黙を過す者は、或は姦を藏す、凡そ事中正を失ふ時は、群邪に墮せざるとなし、且又謙黙二心ありて、之を爲す時は、過さずと雖も、人見て詐姦と爲す。

【宗門無盡燈論】

【正山廣錄】

◎真正決定底の大宗師に非ずんば、必ず之に見ると莫れ、卻て教惑を受けて、汝が悟門を妨ぐ、我初め行脚の時、數員の宗匠に見ゆ、他の開示する所、全く不是とは云はず、只是古人巖頭、雪峰、大慧、虛堂の輩と比對するに、自ら異なる所あり、是を以て胸中常に疑惑を懐て、未だ全く他を信せず、將に謂へり、而今佛法已に滅して、正知正見の者一

佛法に二三  
無し

人も無し、如く、獨り山中に向て且つ古人の様に依て辛  
 參苦修せんにはと自ら時節を待つ、後來先師の道を聞  
 て信疑相半ばなり、自ら謂へり、人の口頭を以て信すべ  
 きに足らず、且く他の開示を聞て後之を決せんと、其教  
 を受るに及で果して從上の祖師示す所の許多の言論  
 に符合せり、歡喜懷に滿つ、是より身命を捨て參決して  
 今に至る、今時諸方の善知識、錯て開示を垂て學者の眼  
 を瞎卻す、他の所得、未だ古人親證の田地に到らざるが  
 爲に、向上の些子は曾て夢にだも見す

⑤ 是佛法本來二あり三あり、淺深麤細あるにあらすと雖  
 も、自らは學者の信力到らず、境智除かず、餘習滅せず、是  
 を以て佛法に許多の差別あらしむるを致す、古人尙

直に實行せ  
よ

是の如し、今人豈然らざらんや。 【宗門無盡燈門】

④ 世尊の在世に一比丘あり、十四難の中に於て思惟觀察  
 するに、通達すると能はず、心忍ぶと能はず、衣鉢を持し  
 て佛所に至り、佛に白して言く、佛能く我爲に此十四難  
 を解して、我意を了せしめば、當に弟子となるべし、若し  
 解くと能はずんば、更に餘道を求むべしと、佛告げ玉は  
 く、汝はもと我に告て、若し十四難を答へば、汝我弟子と  
 作らんと要誓すや、比丘言く、不なり、佛の言く、汝痴人、今  
 何を以てか言ふ、若し答へずば、我弟子と作らずと、我れ  
 老病死の人の爲に説法濟度す、此十四難は、これ鬪諍の  
 法なり、法に於て益なし、但これ戲論、何を以てか問ふと  
 を爲ん、若し汝が爲に答ふるとも、汝が心了せずんば、死

に至るまで解せず、生老病死を脱するを得るに能はず、譬へば人あるが如し、身に毒箭を被て、親族醫を呼び爲に箭を出し、薬を塗らんと欲せんに、便ち云く、未だ箭を出すべからず、我先づ汝が姓家と親里と、父母と年歳とを知るべし、次に箭の出處を知らんと欲す、何の木、何の羽ぞ、箭鏃を作りし者は何人ぞ、作るは何等の鏃ぞ、復弓を知らんと欲す、何の山の木ぞ、何虫の角ぞ、復薬を知らんと欲す、これ何處にか生ず、これ何の種名ぞ、是の如き等のと、盡く了々として之を知り、然して後に汝が箭を出し、薬を塗るとを聽さん、佛比丘に問ふ、此人この衆事を知りて、然して後に箭を出すとを得べきや、不や、比丘曰く、得て知るべからず、若し盡く此を知るを待た

嗜好の優劣

ば、則ち已に死なん、佛の言く、汝も亦是の如し、邪見の箭に、愛毒を塗て、已に汝が心に入るがために、此箭を抜かんと欲して、此弟子と作る、然るに箭を抜くとを欲せず、して、世間の常と無常と、邊と無邊等を求め、盡さんと欲す、未だ得ざるに、則ち慧命を失ひ、畜生と同じく死して、自ら黒闇に投ずと、比丘慚愧して、深く佛悟を識り、即ち阿羅漢道を得たり。

【永平家訓】

④ 人の世に處するに、各々好む所あり、亦各々好む所に隨ふて、以て日を度りて、終に老ゆ、但だ清濁同じからざるのみ、至て濁る者は財を好み、其次は色を好み、其次は飲を好み、稍々清きは則ち或は古玩を好み、或は琴棋を好み、或は山水を好み、或は吟咏を好み、又之に進むは則ち

六波羅蜜

書を讀み卷を開きて益あるを好む、諸好の中讀者を  
 勝れりと爲す、然れども此猶世間の法なり、又之に進め  
 ば則ち内典を讀むとを好む、又之に進めば則ち其心を  
 淨ふせんことを好む、好で其心を淨ふするに至て、世出世  
 間の好の中最も勝れたり。

④六度とは其義如何答ふ、六度を修せんと欲せば、當に六  
 根を淨て六賊を降すべし、能く眼賊を捨て諸の色境を  
 離るゝを名て布施と爲す、能く耳賊を禁じて彼の聲塵  
 に於て放逸ならしめざるを名て持戒と爲す、能く鼻賊  
 を伏して諸の香臭を等ふして自在調柔なるを名て忍  
 辱と爲す、能く舌賊を制して諸味を食らず、贊詠講說名  
 て精進と爲す、能く身賊を降して諸の觸慾に於て湛然

佛道と自己

佛法

不動なるを名て禪定と爲す、能く意賊を調へて無明に  
 順せず、常に覺慧を修するを名て智慧と爲す、度とは運  
 なり、六婆羅蜜は船筏の如し、能く衆生を運んで彼岸に  
 達しむ、故に六度と名く。

⑤佛道をならふと云ふは、自己をならふなり、自己をなら  
 ふと云ふは、自己を忘るゝなり。

⑥取れども手に益つるとなく、探ぐれども跡を得るとな  
 し、即ち是れ諸佛の妙法なり。

【少室六門】  
 【正法眼藏】  
 【傳光錄】

禪宗聖典畢

附錄

# 第一篇 三國禪宗史綱

## 印度之部

### 第一章 釋尊以前に於ける禪の遠流

序説

○西暦紀元前約六百年、皇紀約四十年前、印度迦毘羅城に降誕あらせ玉へて、出家修行其効空しからず、見星大悟の後、四十有餘年の大説法となり、此より結晶し成れる者、之を佛教と稱し、其教主を釋迦牟尼大世尊と爲す、五大洲中宗教多しと雖も、其盛なる者にして、最古に屬し、而も深遠幽妙の教義を有して、世界の太半に傳播せる者は、唯この佛教あるのみ、如是一大佛教に懷かれて

禪宗史最初の  
問題

發育したる佛教、其宗派復決して鮮からず、小乗佛教の分派あり、大乘佛教の分派あり、大乘佛教中分れて、本邦に來たれる宗派而已にても十を以て數ふべく、其細流支派に至ては、一佛教中數千の多に出づべし、此等各宗派中、最も圓熟の域に達し、而も直截簡明にして、理致自から高く、宗教たるの特色を遺憾なく發揮して、實際上特に價值あるの佛教は唯箇の禪あるのみ、然れども此禪の起源を言はば、釋尊にあるべく、其遠流を論せば、釋尊以前にあるべし、以此觀之、禪の歴史も亦遠く釋尊以前にさかのぼらざるべきものか。

◎ 熟々印度の建國を察するに、歴史は之を無言に附して語らざるを以て、正確に判別し能はずと雖も、恐らく西

吠陀成立の  
二學說

曆紀元二千一百八十年前、今より大約四千七百年以前のとなるべし、されば現在の印度人が、中央亞細亞より印度河地方に移住せし當時以來、如何なる思想を有せしかは復た茫乎として知るに由なし、されど西曆紀元前二千年已來より一千年間に成りしならんと想像せらる、吠陀の經典は、實に此印度の思想及歴史を研究する者の最古の材料たるを以て、此經典に果して禪の遠流を見出得べきや否や、此禪史最初の問題なり。

◎ 吠陀經典に關しては、學者の間に大別して二種の反説あり、一はアーリヤ人種の原始的宗教なりと云ひ、他は文化の頗る發達したる後に表はれたる者なりと云ふも、其典籍の内容の純朴清楚なるより見る時は、全く原

吠陀の分類

アーラニヤカハの語義

④ 吠陀の經典は之を五種又は六種に分つと雖も、梨俱吠陀、耶柔樓吠陀、阿他樓婆吠陀、偃馬吠陀の四種と爲は穩當なるべし、此中前の三種は神に對する讚美の頌歌を輯たる者にして、後の一種は祭詞典禮を誌せる者なり。然るに此等經典は印度人が神の天啓より出でし唯一無二の聖典とせられたるを以て、成立後數百年にして益々其内容の解釋を發達せしめ、終には普通人民の曉る能はざるに至り、於此平ブラーマナと、マントラとの區別出で、前者は祭詞儀禮の聖典にして、後者は神に對

吠陀の末葉

⑤ する讚美歌の聖典たり、然れども這のブラーマナは極めて深奥なる意味あるを以て、茲にアーラニヤカハなる解釋書出づ、アーラニヤカハの語義は『寂靜の場處』てふ意味にして、ブラーマナの儀禮は山間の如き幽邃の場處を選びて觀想思惟するを以て、則とするの意なれば、此語義よりするも既に西曆紀元前一千有餘年の當時後代の禪的思惟の如き思想有しとを證するに足べし。吠陀の末葉、印度の文化は愈々發達して、從來神に對して盲目的なりし人衆は、暫く自覺的の時期に入り、茲に人生問題に關して九十有餘種の宗教哲學者を出だし、論議四方に跋扈して甚だ盛觀を窮む、斯く一方に理論的の研窮起ると共に、他方に實踐的の冥想思惟の風潮



優婆尼沙土の語義

は、不知不識の間に成育しつゝありしなり、此時に當り有名なる優婆尼沙土は出たり、恰も此紀元前七百年の頃なるべし。

⑦ 優婆尼沙土は、吠陀經典の解釋なるアーラニヤカハを思辨的に説きし者にして、其語義を察するに『侍座』の意あり、乃ち師邊に侍座りて宗教上の事件を口づから傳へ受るの意なれば、後世に至りて禪門の師資相傳の風習も自ら之が影響の一因となりし者歟。

六派哲學

⑧ 上述の如き傾向を以て發展したる印度の思想界は、紀元前五六百年に至りて、端なくも六派哲學として成立せり、乃ち(一)彌曼婆聲論師、(二)吠檀陀(梵師)、(三)尼夜耶(因明師)、(四)衛生師、(五)勝論師、(六)瑜伽(禪定師)の六派

ヨガの語原と六度八正道

是なり。

⑨ 今此『ヨガ』なる語原を觀るに『相應』の義あり、相應とは、神人の冥合一致するの意にして、此冥合は禪定の力によると考へられたりと、於此乎吾人は觀念、思惟、禪定等の思想は早くも紀元前約二千年の頃より絶えず相續し來りて、紀元前五六百年の當時は、其内容最も進歩しつありしを知るに足らん、彼の原始佛敎に於ける八正道中の第七正念又は第八正定の如き、或は六度中の禪那の如きは、アーラニヤカハ、若くはヨガの影響決して之なしと云ふべからざるなり。

斯く觀察し來りたる吾人は、現今成立せる禪の遠流は禪尊以前の紀元前少くとも一千五百年頃にあるべし

と想像せざるを得ざるべし、然りと雖も直に之を禪の起元と爲すは、大なる誤謬なり、況や禪なりと爲すに於てをや、仍て予は禪の遠流が釋尊以前にありと云ひしも其起元とは云はざるなり。

第二章 禪の起元

○亞細亞の南岸支那の南方印度洋に突出せる二大半島之を泛稱して天竺と云ふ、東西兩印度は即ち是なり、東印度は北緯一度三十分より二十六度三十分に至り、東經九十度より百八度三十分に至り、西印度は北緯六度より三十七度に至り、東經六十七度に起り、九十度に達するの熱帶地にして、沃土肥野の眺晴かに鬱

境域の影響

釋尊と禪の起源

たる深翠天に聳て鮮かなり、然れば人衆は慰ふに樹蔭あり、觀るに花香あり、食ふに菓菜熟し、衣るに布裘豊かなるを以て、其生計自ら悠長となり、其頭腦自ら詩的となり、宗教的となり、從て終に沈思冥想の潮流を惹起せしむるとは當然の理なるべし、さればにや、凡ての宗教は寒帶地に發するとなくして、多くは溫熱孰れかにあり、印度各宗派及宗教も亦然り、而して其裏面に必ず冥想の素地を有し來れるは、吠陀と云ひ、優婆尼沙土と云ひ、佛敎と云ひ、皆な此地域が多少の影響あると明かなりと謂つべし、斯かる土地に發現したるの佛敎、そも奈何、吾人は其敎主釋尊より之を考察せんとす。

○釋尊出世の年代に關しては、異說紛然として五十餘種

釋尊と戒定慧其一

の多きに達せりと雖も、西曆紀元前五百五十年より六百年の間に(木邦に於て普通に唱へらるゝ年代は周の昭王二十八年甲寅即ち西曆紀元前一千零二十七年四月八日)降誕せられ、十九歳にして出家し、三十歳の十二月八日東天に爛たる明星を見し時、忽然として大悟成道し、玉へり、此實に疑も無き禪の起元に於て、此時始て後來稱せらるゝ禪の完成は遂げられしなり。

何を以て之を言ふか、曰く抑も理由あり、現今成立せる禪宗に『禪』を解剖して戒定慧の完備を禪と註せり、然らば釋尊の悟道は果して此三面を完成したりや如何に、若し釋尊の大悟にして、此三面を完ふせざるあらば、釋尊の悟道を直に禪の起元と云ふべからず。

此問題を決するに唯一の方法あり、釋尊の人格即是な

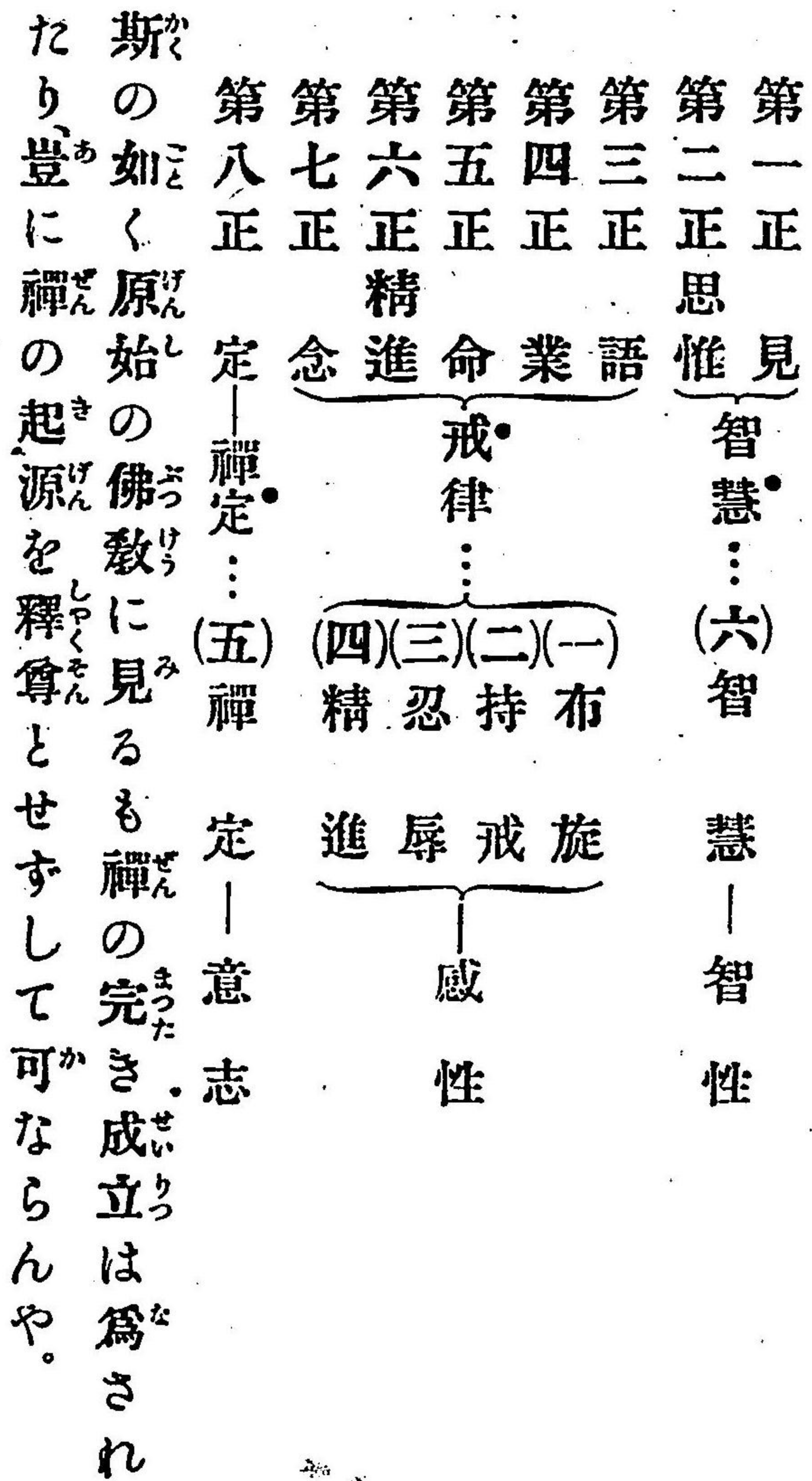
り、人格は智情意の完備なり、釋尊太子たりし時、其聰明倫を越へ、當時有名たる婆羅門所傳の六十四書を讀破したるも、意を充すに足らず、遂に出家、苦行、跋迦、婆仙、阿羅多迦、蘭、鬱、度、羅、々、摩、子、の碩學に學ぶも、亦満足する事なく、自ら機軸を出し、智囊を絞り、先古未見の大道を發見したるの後、横説、豎説、四十有餘年の大説法は、正に是れ釋尊が大智慧の完きなるべし、更に情感の方面を見るに、四門に生老病死の四苦に痛戟せられ、榮冠、財富を放棄して、禁欲の苦行に出で、其一語一動、能く人倫の典型となりしは、正に是れ感性圓滿の發達ならずして、何ぞ又更に意志の方面を見よ、一國の太王たるべき高築を棄つるに、弊履の如く、難行苦行の大修行は、春風に遊

釋尊と戒定慧其二

ぶ胡蝶の如く鵲巢を王冠に代へ、葦坐を貫くも安定不動の六年は、正に是れ意志の不拔なるに因る、智情意の完全如是而も四十九年所説の經典一々三性の調和せざる無し、是れ釋尊が完全の人格より流露し來りたるの結果なればなり、而して其戒とは情性の禁制なり、其定とは意志の不動なり、其慧とは智慧なり、然れば釋尊の人格中自ら戒定慧三學の均等なる大調和の行はれて、圓備完成の禪として存在せしなり、以此予は釋尊の大悟せる其時を禪の起源と決するなり。

④加之ならず釋尊が最初所説の教旨に見よ、八正道と云ひ、六度と云ひ、自ら戒定慧の完備せるを見る、今煩はしければ之を圖示するに止めん。

〔八正道〕 〔六道〕



第三章 以心傳心の起源

以心傳心の意義

○以心傳心は禪の本領なり、心を以て心に傳ふと云ふと雖も、畢竟するに自心を以て自心を窮明するの謂なり、即ち見性悟道これなり、其外更に他事あると無し、斯の如き以心傳心を以て相承し來れる禪なれば、人々各自の心性を發見する時、禪の禪たる真面目は發露せらるるなり、然れども修せざるには現はれず、證せざるには得るとなし、於此乎諸方に道を訪へ、師に侍して禪に參するの要あり、而して師資の機相合する所に以心傳心の事實行はれ來る、是皆諸佛諸祖の行履なり、然らば斯かる意味の以心傳心の起源は、果して如何なる時に行はれたるか。

○釋尊四十九年の說法一日も斷絶するとなし、三百六十餘會の開教は、各々其機根に應じて、大小權實、徧圓頓漸

以心傳心の起源

自ら別ありしと雖も、好箇の大法を永久に傳へんには、其人の宜きを得ざるべからず、釋尊の會下に八萬の土衆ありしも、摩訶迦葉は多子塔前に於て釋尊に見へ奉りし以來、十二頭陀を行して、日用空しく過すと無く、道智衆に絶して爲に釋尊の半坐を領し、三百餘會中の上座たり、一日釋尊靈鷲山上に法要を説き、八萬の衆前に金波羅華を拈す、衆一も會得する者なく、一會總じて啞然たり、時に會中一人の破顔微笑せる比丘あり、是即ち迦葉尊者なり、釋尊一見直に叫んで曰く、吾に正法眼藏涅槃妙心實相無相の法門あり、今悉く汝に付囑すと、同時に金襴衣を授けて相傳の信標と爲す、迦葉此に第一祖となる、是を禪門に於ける以心傳心の起源と爲す。

蓋し、此は釋尊所證の大法を迦葉に傳へたるが如しと雖も、其實迦葉の機根圓熟して自ら茲に到達せる者にして、釋尊と迦葉と冥合せしもの、之を迦葉の心靈中に潜める釋尊を手づから發見したる者とも云ふを得べし、斯くして相續し來れる印度の狀況果して奈何。

第四章 印度の禪系統

第二傳

○釋尊の從弟たる阿難陀は摩訶陀國王舎城主斛飯王の子なり一日迦葉に問ふて曰く師兄よ世尊が金襴衣を授けし外別に什麼をか傳ふと迦葉忽ち阿難と呼ぶ阿難應と諾す迦葉の曰く門前の刹竿を倒却し來れと阿難此言下に大悟し迦葉の大法を相續せり阿難茲に第

第三傳

二祖となる之を以心傳心の第二傳と爲す此より後○摩突羅國に商那和修あり疾く佛道に入りて修行怠なし、一日阿難陀に問て曰く嘗て聞く萬法の本性は從來已來生滅變化に遷されずと何物か萬法の本性なるや、阿難直に和修の着たる袈裟の角を指す和修更に問ふて曰く何物か諸佛菩提の本性なると阿難復た和修が袈裟の一角を引く和修廓然として大悟し阿難の大法を相承せり茲に和修は第三祖となる之を以心傳心の第三傳と爲す阿難の袈裟角を以てしたるは宇宙の實躰遙に言詮を絶し思索を超へたることを示したるなり。○和修の後進に優婆鞠多あり吒利國の人、姓は首陀なるも篤く佛教に歸し、商那和修に待すると三年遂に落髮

第四傳

第五傳

受具して比丘と作る和修一日問て曰く汝十七歳にし  
て出家す身の出家たるや將心の出家なるやと毘多答  
て曰く實に是身の出家なりと和修示して曰く身と心  
とは二ならずして一如なり諸佛の妙法は身心脱落の  
大法なるを以て身心に拘はるべからずと毘多言下に  
徹底して和修の法を相承し第四祖と作るを得たり之  
を以て心傳心の第四傳とす。

④ 提多迦は摩訶陀國の人毘多和尙を禮して出家せんと  
す毘多問て曰く汝出家せんと志す身の出家か心の出  
家かと提多迦答て曰く子の來て出家せんとするは身  
心の爲に非ずと毘多更に問ふ然らば何物か出家する  
や提多迦曰く出家は我無之が故に我所もなく心も境

第六傳乃至  
第廿八傳

も共に無きが故に不生不滅の大道なり諸佛も亦然り  
心も亦然なり形相無きを以て其體ある無しと毘多其  
心事を嘉して教て曰く汝大に徹底して自己の心靈に  
通達せよと提多迦俄然として大悟し師資契機の印證  
を得て第五祖となる之を以て心傳心の第五傳と爲す時  
に皇紀前大約三十餘年の頃なり。

⑤ 印度相傳の傾向は譬へ其問言應語の同じからざる者  
ありとは云ひ總て上叙の着色にて一貫せりされば煩  
はしく記述するを止め但單に相承の道程のみを云  
はし提多迦は之を彌遮迦に傳へ彌遮迦は之を婆須密  
に傳へ密は之を佛陀難提に傳へ難提は之を伏駄密多  
に傳へ密多は之を脅尊者に傳へ脅は之を富那夜奢に

智辨 菩提多羅の

傳へ、夜奢は之を馬鳴に傳へ、鳴は之を迦毘摩羅に傳へ、  
 羅は之を龍樹に傳へ、樹は之を羅喉羅多に傳へ、多は之  
 を迦那提婆に傳へ、婆は之を僧伽難提に傳へ、提は之を  
 伽耶舍多に傳へ、多は之を鳩摩羅多に傳へ、鳩は之を闍  
 夜多に傳へ、闍は之を婆須盤頭に傳へ、婆は之を摩拏羅  
 に傳へ、摩は之を鶴勒那に傳へ、鶴は之を師子に傳へ、師  
 は之を婆舍斯多に傳へ、婆は之を不如密多に傳へ、不は  
 之を般若多羅に傳へ、般若多羅は之を菩提達摩に傳ふ  
 之を第廿八祖とし、達摩は印度相承の第廿八祖となる、  
 實に是西曆紀元五百年前後にして、皇紀一千一百六十  
 年前後なるべし。

⑥ 西曆紀元三百四五十年(仁徳天皇三十年)前後、東晋の穆

帝前後の頃南印度に香至王あり、三愛兒を有す、長を月  
 淨多羅、次を功德多羅、季を菩提多羅と各く、王深く佛教  
 を信ず、東印度の般若多羅、諸方に遊化すと聞き、請して  
 供養を設く、般若招に應じて法要を説き、加ふるに三愛  
 兒の智量を檢めんとし、施す所の寶珠を示して三子に  
 問ふ、諸の寶の中、能此に及ぶ者ありやと、長子と次子と  
 は、只其貴き所以を以て答ふ、季子は然らず、其答に曰く、  
 是寶珠貴しと雖も、世寶にして上と爲に足らず、諸寶の  
 中、法寶を最尊貴重なり、復是光は世光なり、智慧の光明  
 には及ぶべくも無し、而して是珠明は世間普通の明の  
 み、心明に比ぶべくもあらず、是世寶なり、世光たり、世明  
 たるの珠は、珠自ら價値あるに非ずして、時と共に變り、



世寶と法寶

達摩の名稱

人と共に遷りて、善惡尊卑に左右せらるる、法寶は然らず、己自ら太尊貴生にして時處位人によりて評價せらるべくもなし、加之ならず、法寶には形相なきを以て有爲變遷を絶し、而も能く一切有相の原理となりて、天地の萬有を化育す、此財を以て得べからず、道力存して始めて現はれ得べしと、般若多羅聞終て其神材に喫驚し、我法嗣なるを認めしと雖も時期にあらざるを慮りて黙して去る、後幾許も無くして父王崩す、衆皆哀號するに菩提多羅獨り其櫃前に走りて入定すると七日出で、般若多羅に見へて出家す、一日師の室中に七日入定す、時に師が坐禪の玄妙を説けるを聞て無上智を發す、師示して曰く、汝は諸の教法に通達し得たり、夫達摩は最

南天竺に於ける布教時代の達摩

六宗破砕の達摩

大の法性に通達せるの義あるを以て、爾後宜しく「達摩」と名くべしと、達摩の名稱は斯くして起りしなり。

⑦ 達摩は師命を奉じて南天竺に在り、師事すると多年、般若多羅の寂せし後と雖も、南天の布教に努力すると、六十春と傳へらる、當時、佛陀、跋陀の門下に佛大先と佛大勝多の二僧あり、初は佛陀、跋陀に従ふて共に小乗の禪定を學びしも、大先は般若多羅に會へ終に小を捨て、大に歸し、達摩と共に般若多羅の二甘露門と稱せらる、然るに大勝多の徒は分れて六派となり、各々旗機を建て、論難甚だ盛んなりき。

⑧ 六派とは即ち一有相宗、二無相宗、三定意完、四戒行宗、五無得宗、六寂靜宗是なり、此等六宗の徒が懐ける思想は、

佛異見王の排

異見王と達磨の會見

達磨の眼光より見てこそ愚劣なれ、當時南天の文化として、哲學思想の代表とも見るべきは實に此六宗なりしなり、達磨は單騎進前舌鋒閃然として六宗を破すると鋭く悉く彼徒を斃して己が門下と爲しぬ、於此乎達磨の聲名巍峩として五天竺に高く、諸方の學者靡然として達磨の足下に歸趨せり。

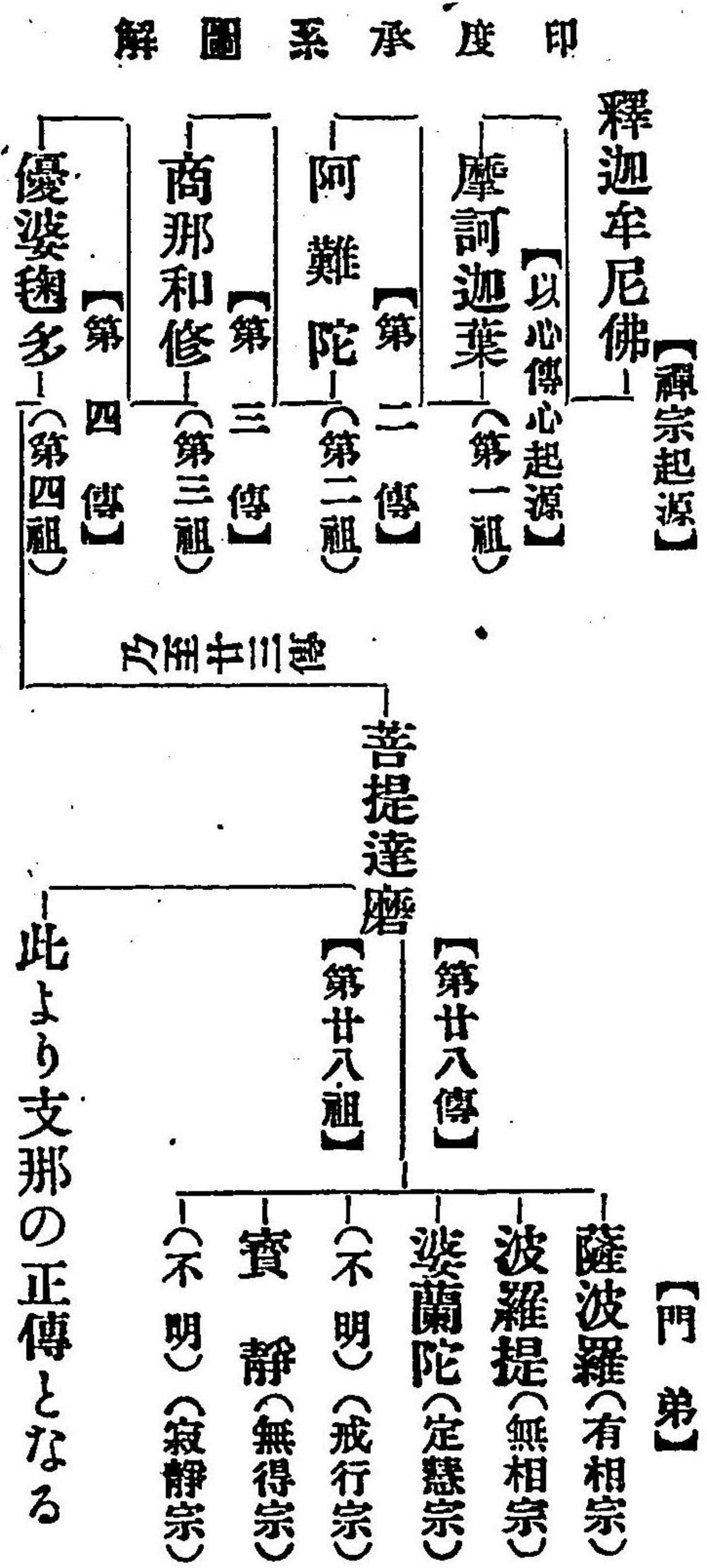
⑩ 其後、達磨が肉兄月淨多羅の子に異見王なる者あり、大邪見を起して佛敎を毀謗し、大患を企つるに會ふ、達磨大師當時此地に來遊して、其姪なる者の邪見を見、哀憐の道情は黙するに忍びず、門弟中の秀才波羅提(先に無相)を遣して説かしむ、王茲に始て叔父の未だ世に在ることを知り、直に達磨大師に見へ、急轉直下大歸佛家たるに

達磨支那に向ふ

至れりと云ふ、蓋し達磨の年齢は此時正に一百二三十壽たりしなるべし。

⑪ 異見王との會見は、達磨大師が印度敎化の最末期なり、然り大師は會見後幾許もなくして般若多羅の祖塔を拜辭し、同學に別を告げ門弟を誡め、再び異見王を慰撫して曰く、汝降後白業を勤修し、三寶を守護せよ、慎で懈怠するを勿れ、今や母國の敎化盡きて震旦に入らんとす、度生の春秋九回せば、即ち廻らんと、王之を聞き、無然として其別を惜で曰く、此の國何の罪ぞ、彼土何の福ぞ、尊叔父吾の有縁なるも止むべからず、唯願くば祖國を忘れず、宿志遂げなば、速に歸來せられよ、と王躬ら臣僚を率ひて海岸に送り、大船を實るに珍寶を用ゐ、以て其

行を盛んにせりと、時に西暦紀元五百二十五年、我朝繼體天皇の十九年、梁の武帝普通六年の頃なり、達摩は斯の如くにして祖國を辭し震旦に向ふ震旦の禪風將たまた作麼生。



支那最古の文物と佛教

支那之部

第一章 教禪混淆時代の禪風 (第一期)

○ 達摩大師が震旦に渡來以前凡そ七百五十年即ち先秦の始皇帝前後既に支印の交通あり従て佛教の沙門室利防等十八人佛教を齎して來りしと云へるより見れば、藤隴げ乍に傳り居たるが如し、由來中華の文運は西曆紀元前凡そ二千二百年前後よりして天文地文の學さては教刑に至迄の制定ありし程なれば、西曆紀元前十六世紀の頃即ち東周時代よりして創作的の哲學は發生せしなり、彼の深遠の哲理を創唱せし老子の如き又は關伊子の如きは、少くとも西曆紀元前六百年代に

先秦以後前漢末に至る状況

出でしなるべし。若然りとせば、釋尊の印度に降誕せられたるの當時、老子も既に支那の土に現はれたりと謂つべき歟。斯の如き國土なるを以て、西曆紀元前五百年より五百五十年の間には孔子出て儒を唱へ、墨子楊子の輩出となり、列子、公孫龍の徒愈々出で、中華文運の盛觀を極めぬ。次で紀元前四五百年の間に、鶏冠子出で、其後百年ならざる紀元前四百年代の末葉に、莊子は現はれぬ。此より約四十年にして孟子出で、三十年にして荀子あり、降ると約八十年、秦の韓王の代に韓非子あり、此觀之、佛教の朦朧げ乍に傳はりし先秦の始皇以前支那文物の光は燦然として照し居たりしなり。

○然れども此佛教傳來は歴史的に確證すると能はずと

前漢の末葉に佛書發見せらる

雖も、始皇帝の三十四年、詩書百家の語を焼て、挾書の律を設け、翌年、儒生四百六十人を坑にしたるが如きは、老佛の曲解が自然主義的に帝の腦裡に彫れたるには非ざる無歟。降ると幾許ならずして前漢の代となり、三十年にして、文景二帝の黄老崇拜となり、賈誼出て、儒法二家を調和し、次で二十年、淮南子成る。老莊風の學は依然として持續せる者の如し。次で武帝の元狩年中、匈奴を伐て、金人を得、之を甘泉宮に祭れるあり、降ると約七十年、元帝の朝より治極りて亂れんとするの形勢となり、漢代の衰運は茲に芽を出せり。成帝の鴻嘉二年、即皇紀六百四十二年、垂仁天皇の十一年に、劉向書を文錄閣に校せし時、佛經を發見せりと云ふ。蓋此は先秦の頃傳來

東漢時代の  
教風

支那佛教の  
紀源

沙門寺院譯  
經の始四十  
二章經の  
譯出

せし者には非ざる歟、次で十有餘年哀帝の元壽元年博  
士景憲等月支國に到て口づから佛經を受たりと云ふ。  
此より四十三年を経て光武皇帝位に即き、都を洛陽に  
定て東漢と爲す、實に此漢室の中興にして、文物此より  
燦然として起れり、光武世を治むると卅三年明れば明  
帝位に即て永平と改元す、之を後漢と稱す、永平七年帝  
蔡愔等十八人を遣して佛法を天竺に求む、蔡愔等彼國  
に到りて摩騰に遇見し、請して永平の十年に歸朝す、此  
支那佛教の紀元第一なり、摩騰直に洛陽に入り、帝に  
謁す、帝の優遇賞接筆に悉し難し、直に城西の門外に精  
舎を建て、摩騰に居らしむ、白馬寺即是なり、摩騰直に  
「四十二章經」一卷を譯出す、これ支那に沙門譯經及寺院

あるの嚆矢とす、同十五年白馬寺に於て釋道二教の優  
劣を決するに、佛教大に利あり、此より佛教の勢運駿足  
の如し、然れども未だ佛教高遠の理談に及ばざるを以  
て、此時代は寧ろ通俗的の佛教なりしならん、以此先秦  
以後後漢の第八世質帝に至る大約三百九十二年間は  
支那佛教の混沌時代にして、復教禪混淆時代と爲すを  
得べし、されど教禪の混淆は更に異りたる形式を以て  
後漢の中葉より持續せるを以て、予は假に上述の時代  
を教禪混淆の第一期とせん。

第二章 教禪混淆時代の禪風 (第二期)

○第二期の教禪混淆時代は、後漢の中葉、桓帝の時(成務天

時代區劃

後漢末の禪  
譯狀況

禪教典の翻譯

皇十七年(元)より姚秦の終(允恭天皇八年)に至る二百七十三年間と定む。

②第一期と第二期との區別は、桓帝の建和元年(支國の沙門支謙なる者洛陽に來りて般若三昧經、阿闍佛經等廿一部の譯出と翌二年、安息國の三藏安清高なる者洛陽に來りて禪定方便次第法經一卷、禪法經一卷、思惟要略經一卷、五門禪要用法經一卷、禪行法想經一卷、禪行三十七品經一卷、佛說守意經二卷、佛說堅意經二卷、佛說馬意經一卷)等の譯經ありて、茲に始て禪經と大乘佛教の傳來ありしとによる、彼の淨土教の淵源たる無量壽經の譯者も、即ち此の安清高にてありしなり、此より三十二年、即ち靈帝の光和三年に竺佛朔道行般若經を譯出

三國時代の  
教風

し、爾後四五十年の間に、支婁迦讖、支曜等の翻譯家前後して出で、漢末に至る翻譯の部數三百有餘の多きに上れるを見れば、其中禪經二卷等、其他禪部に關する翻譯ありしと想像に難からざるなり。

③此より蜀、魏、吳の鼎立となり、歴史は之を三國時代と呼ぶ、魏の黃初二年、中印度の曇摩訶羅律を持して洛陽に來る、吳の孫權が康僧會に歸依して、建初寺を建てしは、其翌年の事なり、此抑も江南佛教の隆盛ある第一着歩にして、佛教歴史上看過すべからざるの事件とす、翌々五年、月支國の支謙洛陽に來り、終去つて吳に至るに及んで、譯經一百廿九部を出せりと、支謙の譯に「禪秘要經」四卷等は當時の翻譯なるべし、次で廿五年、魏の嘉平二

戒律傳來の始

講經の始

西晉時代の教風

年中天竺の沙門曇諦來りて曇摩訶羅と共に僧祇律一本を譯し、曇諦更に四分律の調摩一卷を譯出す、此を支那に律あるの權輿とし、之より戒法戒文世に行はる、同四年、康僧鎧、洛陽に「無量壽經」を譯し、次で九年、景元の始に朱子行專ら道行般若の講演を張る、此を講經の嚆矢とす、然れども、此時代の佛教は主に吳魏の間に行はれ、此等と相對して老莊の學次第に興り、禪ならぬ禪的傾向益々横溢するに至れり。

④ 皇紀九百廿五年、司馬炎、四十五年間に亘るの三國鼎立を統一して洛陽に都し、改元して泰始と爲す、即ち此を西晉と云ふ、我國神功攝政の第六十五年なり、此時代、禪史として記すべきなしと雖も、老莊の學は一變して神

支那密教の嚆矢

仙家となり、葛洪出て愈盛んに、終に其祖述家たる抱朴子を出せり、越て太康二年、竺僧婁至、廣州に來りて十二遊經を譯し、同七年、竺法護、長安に來りて正法華經等二百一十部を譯し、元康二年、放光般若經の譯は成れり、爾後九年の永寧元年、竺僧竺叔蘭、白法祖、支法度、法立、法矩等、長安に來りて譯經百六十五部に達すと云ふ、豈盛んならずや、然るに永寧の後には、群臣蜂起して中原沸くが如く、果は五胡の亂となり、次で八王の亂となりて、佛法大に挫折せり、永寧を降ると八年、即永嘉四年、帛尸黎密多羅來りて佛說灌頂經、孔雀王經を譯す、此を支那密教の嚆矢とす、同年、佛圖澄の來るに遇へ、支那の佛教大に振起するに至れり、同六年、盧歆、道安を請して經を講せ

西晉の終り  
姚秦前の  
教風

しめ、道安の聲價襄陽を壓せり、只茲に注目すべきは道安は佛圖澄の弟子にして、廬山の慧遠の如きは道安の弟子なるを察せば、道安の講經に禪的の思想決して含

⑤

有せずと云ふことなかるべし。司馬晋の統一は僅々五十有二年にして、東晋と劉漢に岐る、東晋は元帝江南に踐祚するより始る、故に之を江南と云ふ、隋の一統に至る二百七十三年間なり、然れども劉聰の漢は忽ち分裂して前燕、前趙、後趙となり、次第で二となり三となりて前秦の世となる、是即ち姚秦の謂なり、今西晋の終より姚秦に至る四十年間を考ふるに、大興元年には竺潜經を内殿に講ず、次で石勒の歸佛となり、王右運、達摩多羅の爲に廬山に歸宗寺建立となり、

阿毘曇宗の  
嚆矢

沙門王者を可拜か不可拜かの論争に花を咲かしめ、降て建元年中、僧伽提婆、僧伽跋澄の來朝ありて、阿毗曇心論等の譯出となれり、此支那に阿毘曇宗あるの嚆矢たり、而して又「治禪法經」一卷の如も、東晋の年間、竺曇蘭によりて譯出せられ居るを見れば、禪風の下火ながらも持

⑥

皇紀一千〇十七年、歴史は之を姚秦の世とす、此より十二年の太和三年、尼道馨、法華經、維摩經を洛陽の東寺に講ず、維摩經は實に此禪門須要の經典なり、維摩經の講演は時代精神の直接なる要求には非ざるべしと雖も、當時老莊の學盛んなるに對照せば、時代に同化せるの傾向無しと云ふ可からず、降て太元六年、法正、竺曇無蘭

姚秦時代の  
教風  
維摩經の講  
演



勅葬の始

淨土の開教

羅什の渡來  
一 變佛の第

來りて「治禪法經」一卷、禪思満足經等の譯出で、後、慧遠の法性論成り、同十一年支那南北朝は開始せられ、當時孔孟の學殆んど退きて老莊學獨占たるの觀あり、同十六年法勝毘曇四卷を譯出せらるゝと同時に、慧遠によりて南方に淨土教の開教となれり、此南北の朝は、支那佛教史上、深く注意すべきの時にして、佛教の隆盛は前代未聞の壯舉を呈せしなり、彼の四聲譜の如き實に當時の悉曇聲韻の學より生ぜし者にてあるなり、南北朝岐れてより十三年、魏の太祖大に佛教を興隆し、翌年法顯三藏の渡天と前後して、後提摩多三藏來り、龍樹の釋摩訶衍論を譯出し、隆安元年鳩摩羅什、長安に來りぬ、支那の大乗佛教は道安、慧遠等によりて、端緒を開きしと雖

戒律大に備

も、羅什の渡來は大乗佛教に大蔚興の機運を與へし者なるを以て、支那佛教史上に於ける第一變として、羅什渡來の日を記憶せざるべからず、秦主姚興、國師の禮を執りて逍遙園に遇し、雲と集る沙門の主となりて、共に經論三百餘部を譯せしめしと云ふ、禪法要解二卷、思惟略要法一卷、佛遺教經一卷、維摩經、禪秘要法經三卷、坐禪三昧經二卷等も、此の時に譯出せられしなり、什公の門に僧肇、道融、僧叡等秀才極て多し、而して羅什の傳來せる佛教は、主として三論にあるを以て、什の渡來は尙ほ三論宗の遠源と謂つべきなり。

⑦ 次で元興元年、弗若多羅、十誦律の梵本を持して來り、羅什之を譯出す、越て五年(義熙三年)佛陀耶舍來り、竺佛念

禪經典の翻譯

達磨多羅禪經 江東禪風の素地

と共に四分律を譯すると六十、同六年法顯三藏、印度を  
跋渉して歸來し、同九年北本涅槃經四十卷譯出せられ  
て涅槃宗の起源を立せると共に、佛跋陀羅覺賢三藏  
廬山の蓮社に到りて慧遠と、達磨多羅禪經を譯する等  
禪風の鼓吹につとめ、江東禪風の素地は斯くして作ら  
れたりと云ふも過言に非ざるべし、而て佛跋陀羅が  
其師佛大先に學しと云ふは、佛大先が達磨の師たる般  
若多羅の門下となりたる後なるべく、さすれば佛跋陀  
陀羅の廬山に將來せる禪風は、般若多羅の傍系と見る  
べきか、加之ならず、佛跋陀羅の二高足たる智嚴玄高  
等も、當代禪風の鼓吹者にして維摩經の講演と白蓮社  
の禪經翻譯と相俟て、不知不識の間に、禪風勃興の時期

結尾

來れかしと期待しつゝ、ありし者の如し。  
⑧ 吾人は上叙の二章に於て、教禪混淆の兩時期を略述し  
終れり、次に現はるゝは、等しく混淆時代とは云ひ、多少  
の形式を有し來れる時代なるを以て、劉宗を以て第三  
期の限界となさんとせしなり。

第三章 教禪混淆時代の禪風 (第三期)

時代區劃

① 皇紀一千〇八十年、劉裕大舉して秦を退けて宋王とな  
る、歴史は之を劉宋と命ず、此年より梁の武帝大通元年、  
即ち達磨大師の西來に至る一百十八年間、之を第三期  
の教禪混淆時代と名く、此年間に於ける教風果して奈  
何か。

劉宋時代の  
教風

禪寺あるの  
始め

五門禪要法  
の譯出

○劉宋の永初元年、范泰の祇園寺、謝靈運の招提寺、建立は  
 兎も角として三年目の少帝景平元年、曇無讖大涅槃經  
 卅六卷の譯出あり、曇無讖は白頭禪師に參じて大乘を  
 學びたりと傳へらる。翌歳の元嘉元年、曇摩密多なる者  
 地を刑州に選んで長沙寺を創建す、是云迄も無く禪閣  
 にして、密多の譯に「禪秘要經」五卷、五門禪經要用法一卷  
 あるを見れば、此等諸譯家は、正統的禪風の鼓吹者ならざ  
 るにせよ、茲に始めて支那禪の具體的表現が發せられし  
 なりと云ふべし、此年復密多の建康にありて觀普賢經  
 十部の翻譯あり、同時に盪量耶舍觀無量壽經を譯出し、  
 南本涅槃經卅六卷は之と前後して惠觀等によりて補  
 定せられ、未だ幾許ならずして僧伽跋摩、求那跋陀羅は

來朝せり、求那跋陀羅が「阿蘭若習禪經」二卷の譯出も亦  
 當時なるべし、次で成實宗の傳來となり、支那戒壇の創  
 設となりて佛教の舉揚盛んなるの時、青天の霹靂は魏  
 の太武によりて發せられぬ、即ちこれ廢佛毀釋の詔  
 なり、于時元嘉廿三年、魏の太平眞君七年、然れども四歲  
 ならずして帝の悔悟となり、翌々三年、文帝即位して  
 佛法の復興となる、實誌公は實に此時代に生誕せしな  
 り、孝武、明帝共に佛法に歸し、獻文帝の如きは僧と共に  
 坐禪辨道せりと云ふ、靈辨の華嚴論百卷は、正に當時の  
 作なり、降ると數年にして劉謙之の華嚴論六百卷出で  
 大乘佛教の發展と共に、劉宋八世五十九年にして世は  
 齊と成る。

齊朝時代の  
教風

寶誌禪師の  
出世

③ 皇紀一千一百卅九年蕭道成宋主を廢して立ち、改元して建元と云ふ、歴史は之を南齊と稱す、齊朝僅か七世廿三年間なり、此間禪史として記すべきと少しと雖も、宋末齊初に當りて寶誌公完山に往來せると、建元元年帝莊嚴寺に幸して僧達が維摩經の講演を聽きたるとは、禪風持續の跡を知るべく、降て明帝の建武四年中印度の佛陀禪師來りて嵩山に少室山少林寺を創建せられしは、梁代に入りて達摩面壁の道場たりしとを知るに足る、加之ならず、禪教系に屬する寶誌禪師は、此年正に五十二齡に達せるを見れば、其著大乘讚十首、不二頌の禪的一如思想を鼓吹せるの態度を以て、傅大師等と共に當時の禪風發揚に努力せしと想像に難からざるなり。

梁初達磨以  
前の教風

④ 皇紀一千百六十二年蕭衍齊帝を廢して自立し、改元して天監と爲す、歴史はこれを梁朝と呼ぶ、齊王七代多くは佛を奉せしと雖も、梁の武帝に至りて三寶の興隆益益熾なりき、天監三年親ら群臣道俗二萬餘を率ゐ、重雲殿に上りて歸佛を標榜し、道教を棄てたるが如き、同年帝躬ら大品般若經を註するが如き、翌七年菩提流支勤那摩提を詔て十地論を譯せしめて、地論宗の權興となりし如き、降て十三年寶誌の寂に遇へ、帝親臨して之を鐘山に葬り、開善寺を創するが如き、一として護法の大業ならざるは無し、此と相對して北魏に、維摩經、勝鬘經の講演盛んに行はれ、洛陽に來る竺僧のみにても三

千を越へ、州群の僧衆二百萬と註せらる、其他天監十四年、魏の胡太后、永寧寺を建て、九十丈の天に聳て、角鈴の聲十里に鳴ると傳へらる、其盛觀又見るべし、梁の高僧傳は當時に成り、三藏記、釋迦譜、弘明集等の著者、僧祐は此時代に寂せしなり。

⑤ 回顧すれば、先秦以降七百五十有餘年、佛教の傳播斯の如く、後漢の末葉已來數十の禪碩と禪經の翻譯ありて、禪風を扶植すると斯の如し、斯くして震旦の機縁漸く熟し、東西相呼應し、支天相啐啄して、遂に達摩太師の西來となれり、達摩の支那に入り來れる、豈夫偶然のとならんや。

東西呼應の時期

第四章 正傳禪風の時代

第一節 達磨西來以後、元朝に至る

時代區劃

○ 若夫禪風の盛衰又は宗師家の異風を中心とせば、時代の區劃も種々なる名稱を以て分たるべしと雖も、予は支那朝廷の變遷を中心として、梁、陳、隋、唐、後梁、後唐乃至趙宋、元、明の順序を以て分たんとす、是偏に初學者をして、支那年代の智識と禪風の推移とを知らしむるに便ならしめんとてなり、之に依て區劃せられた時期は左の如し。

第一 達磨西來以後隋宋に至るの禪風……………(自皇紀一二八〇至皇紀一二七〇)

支那朝廷の變遷と時代別

- 第二 唐朝の時代の禪風……………(自皇紀一五七六)
- 第三 唐朝以後宋代の禪風……………(自皇紀一九一六)
- 第四 元朝時代の禪風……………(自皇紀一九二〇)
- 第五 明朝以後の禪風……………(皇紀二〇二八後)

第二節 達磨西來以後隋末に至るの禪風

① 支那の禪風は上述の如くにして扶植せられたりと雖も、未だ一家を成すに至らず、曇摩蜜多の長沙寺と云ひ、佛陀禪師の少林寺と云ひ、共に禪閣たるに相違なきも、唯其形式が具體的に顯はれしのみにして、畢竟傍系の禪風のみ、許すに正統と爲すべからず、且つや安清高等によりて傳へられたる小乘禪の外、羅什等の大乘的禪なきにあらざれども、之とて、後來發達せるが如き正傳

達磨以前の禪風

系統の禪には非ずして、教禪混淆なるや明かなり、然れども此等禪風扶植の氣運によりて、東西相呼應せしとは事實なり。

達磨愈々西來す

② 達磨大師が西來の年代に就ては異說多しと雖、予は暫く梁の大通元年九月廿一日南海の廣州に着と定めん、此云迄も無く出發以來前後三年を費せしなり、此年十一月一日往て當時佛心天子の稱ある大歸佛家武帝に會見しぬ、大師は弘法の太志を懷きて劈頭帝に見へ、帝亦た無上の大法を獲んとして大師に接す、鐵石相磨すれば必ず火を發すべきに、帝の機未だ熟せず、問答往來更に要領を得ず、留ると旬餘、達磨終に孤舟を揚子江に浮べて魏に赴き、首都なる洛陽に達す、恰もこれ十一月二

嵩山接化の達磨

十二日なり、魏主孝明帝篤く之を迎ふれども辭して應せず、直に北の方嵩山の少林寺に到つて壁に面て坐禪す、之を面壁と稱す、斯くして機の熟するを俟つと前後實に九年唯黙を守りて語を發せず、時人之を知らず、只呼で壁觀婆羅門と云ふ。

③少林に面壁すると九年唯黙のみを守ると傳せらるゝも彼の道副、道育、尼總持、慧可等は其間の接化を蒙りたるや明かなり、大師、魏主の請を辭して少林に入りてより、唯黙を守る其聲名四方に流布す、時に洛陽に神光なる者あり、幼にして志氣、人に同じからず、廣く群書を讀み常に歎じて曰、孔、老の教は禮術の風規のみ、莊、易の學また玄妙を盡さずと、乃ち寶積禪師に依て出家、受具し、

慧可雪中に臂を斷つ

深く、大小乗を學ぶ、一日般若經を見て真空の妙理を自得す、此より安坐修行すると八星霜、一夜夢に嵩山に大徳あるを見、喜び往て達磨に見ゆ、時維大通二年十二月九日なり、大師容易く入を許さず、神光止なく窓前に立つ、是夜降雪積で腰を埋め、北風針の如く骨髓に徹し、涙落ちて氷丸と成る、於此か神光思惟すらく、古人の道を求むる、骨を敲て髓を取り、饑を濟ふに血を刺すの縦跡あり、例令血潮凝結して氷となるも、大師の示教なくんば、一步も退かずと、遲明に及びて大師、神光を顧て問て云く、汝雪中に立て何事をか求むと、神光曰く、惟願くは和尚慈悲を垂れ、廣く大法を開て群品を度し、玉へと、大師曰く、諸佛無上の大法は容易の業に非ず、豈小徳小智

を以て冀求すべけんやと云たる而已にて更に願視せ  
 ず神光の落涙百行千行求道の志氣益々加りぬ密に利  
 刀を取て自ら左臂を断ち之を大師の面前に呈す大師  
 遂に其心事を諒とし名を慧可と改めて入室を許す此  
 より師に侍ると入春秋薪を折り水を汲で求道に餘念  
 なく或は問ひ或は答て心地を究明す其第八年の或日  
 遽に門弟に告て曰く吾魏に入て既に九年今や西天に  
 還らんとす汝等各々其所得を陳よと時に道副尼總持  
 道育等各々其所見を述べ師之を證するに汝吾皮肉骨  
 を得たりと云ふも未だ精髓を得たりとは云はず終に  
 慧可あり師の前に趨り出て禮拜し終つて自位に歸て  
 立つ師之を證して曰く汝吾が髓を得たりと正にこれ

達磨最後の  
 說法

猛虎の絶峰に嘯きて雲漢の明月を弄ぶに似たり達磨  
 更に慧可に告て曰く釋迦牟尼如來正法眼藏を以て大  
 迦葉に付す展轉して我に至る我今之を汝に授く汝護  
 持して断絶せしむると勿れ并に汝に袈裟を授け以て  
 法信と爲す各々所表あり宜く知べし唯恐る後世我と  
 汝と其國土を異にせるを以て或は其師承を信せざら  
 んを然る時は汝此を以て驗となし其宗趣を定めよ吾  
 逝ける後二百年衣鉢止て傳らず法大に榮ゆと雖も道  
 を知者は多く道を行ずる者は少し理を説者は多く理  
 を悟者は少からん然れども密證を通ずると決して千  
 萬を下らず汝勉勵顯揚して未悟者をも輕んずる勿れ  
 と終に偈を説て宣く



吾本來茲土。傳法救迷情。一花開五葉。結果自然成。

と復更に謂つて曰く茲に楞伽經四卷ありこれ如來が法要の極談にして心地の法門なり世人の爲に開示悟入しむべしと於此慧可大師は震旦に於ける禪の二祖となり禪相承の第廿九祖と云はれ達磨は西天の廿八祖東土の初祖と唱へらる時に魏の文帝大同元年皇紀一千百九十五年なり

④ 達磨大師が二祖慧可に法を傳てより降ると廿二年南朝は陳の代となり北朝は東西の兩魏となり東魏十七年にして北齊となり西魏四世廿四年にして北周となり三十年を出ずして北齊は北周に合し合せる

達磨以後隋  
朝以前の禪  
風

支那佛教の  
第二變

北周五世廿五年にして陳朝と共に隋朝に統一せらるるに至る迄大約四十五年其間一般佛教としては攝大乘論の譯出あり大乘起信論の譯出ありて攝論宗の起源となり真如緣起の紀源となりて支那佛教界の第二變を劃し次で俱舍論の譯出で大小兩乘の佛教愈々出づるの時周の武帝によりて廢佛令は下りぬ此前後にありて正統以外の禪風は南岳の慧思等によりて鼓吹せられ正統の禪は二祖慧可の傳道となり北齊の孝昭帝建元年間二祖は僧燦を得法を傳へて三祖と爲す此を相承の第三祖と云ふ此間二人共に禪風の擧揚に力むされば達磨寂後隋朝以前の禪風は實に此二人に限られたりと云ふべきか。

隋朝時代の禪風

⑤ 皇紀二千二百四十一年隋の統一となり、降ること十三年即ち開皇十三年二祖大師百七の高齡を以て寂す、未だ幾許ならずして三祖は四祖道信を得て法を傳ふ、此を第四祖と爲し、相承の卅一祖と云ふ、信心銘の講演は隋の煬帝前後なるべし、此より先陳末隋初に當りて智顛、天台、山に在り、爾後十數年の間金陵等を往來して、法華、玄義、摩訶止觀等の講演ありて、支那天台宗は開創れたり、要するに隋朝は、支那史上最も紊亂の時にして、道徳腐敗し、綱常衰微して、罪惡百出し、亂刑至らざるなし、と雖も創業時代の禪宗史としては、何等の波瀾も無き無事沈靜の時なりしなり。

第三節 唐朝時代の禪風

唐代佛教の總括

① 皇紀一千二百七十八年隋の煬帝其徳を失し、李淵帝位に即て長安に都す、歴史は之を唐朝と呼ぶ、其間實に二百八十九年、史家は之を四分して初唐、盛唐、中唐、晩唐と爲す、此年間に於ける佛教は、前代より持續して大成したる、念佛宗、戒律宗、華嚴宗、禪宗等にして、殊に禪宗は、達磨大師より二祖慧可、三祖僧燦、四祖道信と單線的に相承し來りしも、唐代に入りては愈々其盛觀を呈すると共に一大分裂を生ずると、はなれり、後之を呼で禪の五家七宗と云ふ、此等は孰れも唐代二百有餘年文化の根底となりたる貞觀以後其馥郁たる花實と稱せらるる、開元天寶の頃に至つて、愈々其分脈を形成せしなり。

② 初唐は高祖の武徳元年より睿宗の先天元年に至る九

初唐の禪風

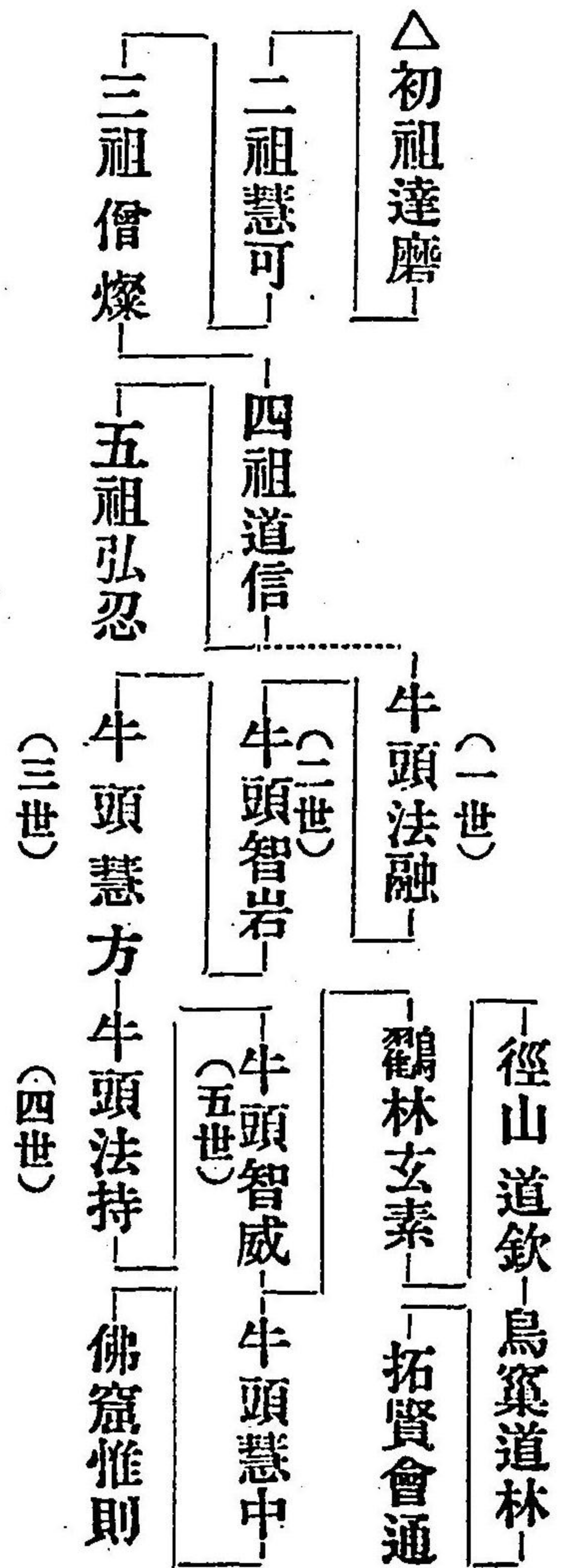
道信禪師下の分裂

十五年間に於て、四祖道信禪師が牛頭山に學侶を接して禪風を擧揚せしは武徳年末のとなり、道信一日黃梅縣に往く途上弘忍に接し、其法器なるを知り、母に乞て出家せしめ終に法を傳て五祖と爲す、之を相承の卅二祖と云ふ、後、道信太宗帝の歸依を得て、洛陽の禪風に一段の光彩を添へたり。

③ 四祖の門下に法融あり、法融の系脈は智巖、慧方、法持、智威と五傳し、智威の下に慧忠、玄素等を出し、忠の下に佛窟、惟則あり、素の下に徑山道欽、支那五山の一たる興聖萬壽寺開山あり、此等を後世牛頭禪と云ふ、されば四祖道信の下より正傳の五祖を出すと同時に、傍系の牛頭禪は分裂を生ぜしなり。

牛頭禪の系統

④ 弘忍禪師が四祖道信禪師の法を得てより、後貞觀年中法融、四祖に見て印證を得たり、此より永徽二年道信禪師七十二壽を以て示寂せらるゝの當時、法融禪師は牛頭山に在て僧三百餘を領じ、門風甚だ盛んなり、今其系統を圖示するに下の如し。



⑤ 而して此牛頭系の禪は中唐の中頃傳教大師入唐して

黄梅山上の傳法

脩然禪師より之を得たるを以て彼が圓密禪戒の禪として本朝に傳來せる者の如し。  
 ⑥ 初唐の中葉、顯慶年中、南海の新州に盧氏なる者あり、一日薪を負て市中に鬻ぎ、會々客の金剛經を誦するを聞き、竦然として省悟し、直に黃梅に至りて五祖弘忍禪師に參じ、碓房に入りて杵臼に服し、呼で盧行者と云ふ、辨道時を空ふせずして八ヶ月を経たり、五祖傳法の機熟せるを知り、會下七百の僧衆に告て曰く、汝等各自意に任て一偈を述べよ、若大法に冥符あれば、達磨以來の正傳たる衣法を授けんと、於此乎七百の僧衆沸が如く、時に會中の上座に神秀あり、學解内外に通じ、古今に達す、衆皆な推稱して云ふ、附法は必ず神秀ならんと、秀、偈を

作り、師前に呈せんとするに、通身汗流れて進を得ざる、こと十有三度、終に三更の夜、四隣人無を窺へ、自ら燈を執り、密かに往て偈を南廊の壁間に書して曰く、身是菩提樹、心如明鏡臺、時々勤拂拭、勿使惹塵埃、と、五祖經行て忽ち之を見、讚歎して大衆をして誦しむ、盧師碓坊に在て之を聞き、同學に問ふに、神秀上座の作なりと、答ふ、盧師云く、美なるとは美なり、雖も未だ心地を了らすと、同學訶して笑ふ、師、夜に至て一童子を伴ふて南廊に至り、秀が偈側に一偈を寫さしむ、其偈に云く、菩提本非樹、明鏡亦非臺、本來無一物、何處惹塵埃、と、衆更に顧る者なし、其夜三更に及んで、五祖竊に碓坊に入り、盧師に問ふ、米白しや未や、師云く、白れり、然れども篩と

北宗禪の分裂

はせじと、祖杖を以て臼を打つと三下す、師箕の米を三  
び簸て祖の室に入る、祖此に於て達磨正法の衣法を附  
し、秀等の害はんを憂へて、夜暗に黃梅を遁れしむ、時に  
高宗の龍朔元年なり、斯くて盧行者は第六祖と爲り、相  
承の三十三祖と云ふ。

⑦五祖の門に、神秀、道明、慧安、智洗等あり、神秀は其後法を  
得て江陵の當陽山に住し、則天武后の歸依、太だ篤く、王  
公大臣、其徳風に靡すと云ふ、殊に中宗帝位に即く  
に及んで、禮遇聲價殆んど其頂に達す、斯して初唐末に  
至る迄、江北禪風の第一祖として、祖苑の發展に努力し  
つゝありしなり、門下に巨方禪師、道樹禪師、普寂禪師、智  
封禪師等は、其駿秀なり、此系統を後來稱して北宗禪と

云ふ、法系は圖の如し。

(日本)

▲五祖弘忍—六祖慧能—福先道璿—大安行表—叡山最澄

北宗神秀—嵩山普寂—終南山惟政—敬愛志真

資州智洗—西京道亮

嵩山慧安—嵩山破竈墮—嵩山峻極

而して北宗禪の系統は叡山の最澄によりて本邦に傳  
はりしとは注意すべき事實なり。

⑧慧能禪師は、黃梅に法を得てより、四會縣の獵師の中  
に隠れ居ると十年、高祖の儀鳳元年、南海に出で、廣州の法  
性寺に印宗法師を接す、是六祖が開教の始なり、幾許な

南北兩禪の異點

らずして曹鷄の寶林寺に歸り、主として江南に徒衆を  
接す、六祖壇經四卷の如きは、當時韻州の刺史韋據の請  
に應じ同州の城内にて説法せるをば、門人の手に録せ  
られたるものなり、故に其説く所は一超直入の頓悟に  
して、北宗の漸々修學の漸悟に反す、乃ち北宗は煩惱を  
漸次に断じて後、菩提道に悟入すべしと教ゆるも、慧能  
は断ずべきの煩惱あると無し、菩提道の求むべき無し  
と唱ふ、慧能の徒、江南にありて頓悟を説くが故に「南頓  
と稱し、神秀の徒、胡北にありて、漸悟を教ゆるが故に「北  
漸」と呼ぶ、然れども能之を吟味する時は、南宗は理論の  
方面なるに反して、北宗は實際を説く者なれば、畢竟一  
物の異なる方面より見たるの差に過ぎずして、兩者共

當時の名僧

盛唐時代の禪風

に互格の價値なくんばあらず。  
九 斯の如く南北兩禪の分派を生ぜし前後、五祖下の慧安、  
无珪の如き六祖下の青原行思、南嶽懷讓、永嘉玄覺、彌多  
三藏の如き、或は牛頭の智岩、慧方の如き、皆當代知名の  
宗師家にして、彼の「法苑珠林」二百卷は、六祖大師が開教  
第一の如き、此と前後して出でたる者也。  
十 皇紀一千三百七十三年、唐の玄宗帝開元元年より、代宗  
の寶應元年に至る五十年間、歴史は之を盛唐と名く、開  
元は唐代文化の中心たると共に、禪風勃興の時代にし  
て共に正傳系分裂の起源なれば、禪史上大に注目すべ  
きの時とす、且又一般佛教史として、善無畏、金剛智、不空

正傳系の二分裂

◎ 開元元年、六祖慧能大師は七十歳の高齡を以て寂す、之の來朝、又は慈愍三藏の歸來、日本鑒眞の入唐の如き、教界の氣運愈々熟せるの時代なり。

◎ 開元元年、六祖慧能大師は七十歳の高齡を以て寂す、之より先、六祖下に、青原行思、南嶽懷讓、荷澤神會、慧忠國師、永嘉玄覺等の高足あり、就中青原と南嶽とは門中の秀才にして、六祖正傳の禪風は此に至りて二派となれり、即ち後世の曹洞宗、雲門宗、法眼宗の三宗は青原の系脈より出で、潞仰宗、臨濟宗の二宗は南嶽の系脈より現はれ、臨濟より五傳して黃龍、揚岐の二派は生せしなり、然れども、盛唐時代にありては、但に青原、南嶽の二分派を生せしのみにして、五家七宗の分裂は未だこれあらざるなり、今當代に活躍せられたる人々を擧ぐれば、行思

盛唐の高僧

懷讓、神會、巨方、司空、山本、淨智、威馬、祖石、頭慧、忠國師等なり、此中行思、懷讓は天寶の初以前に寂し、神會は天寶四年に「顯宗記」を著はし、慧忠國師は肅宗、代宗の歸依を得て、宮中を壓するの聲名ありき。

中唐時代の師家

◎ 皇紀一千四百廿三年、代宗の廣徳元年より、文宗の大和九年にいたる前後七十二年、歴史は之を中唐と云ふ、大曆の始、江西に馬祖道一あり、湖南に石頭希遷ありて、南北の禪風大に振ふ、慧忠國師、前代より、代宗帝の歸依を得たりと雖も、大曆三年、牛頭智威の寂してより、七年を経て寂し、法照禁中に念佛を説くの時、貞元四年、馬祖道一の寂となり、同六年、石頭希遷寂し、同八年、徑山道欽寂せしより見れば、此等の師家は皆中唐前半期に於ける

當時の高僧

寶林傳成る

宗密禪師

活役者たりし也、斯く師家を失したりと雖も、寒山、拾得、  
 現はれて、大乘禪の詩風を張り、南泉、普願、天皇、道悟、  
 山、惟儼、百丈、懷海、龍潭、崇信、丹霞、天然、趙州、從諗、  
 雲岩、曇晟、鹽官、國師、龐居士、烏巢、道林等ありて、愈々禪風の舉揚に  
 力めたり、彼の寶林傳十卷は貞元十七年智炬によりて  
 成り、詩星白居易の如き、又、參學の士も少なからざりき、  
 而して中唐末に及ぶや、天皇百丈、龍潭、丹霞、烏巢、南泉等  
 多く寂して、宗密の教禪調和論出でぬ、宗密は華嚴宗の  
 人たりと雖も、禪を究むること亦深し、其著に「禪源諸詮  
 集」「圓覺疏」「拾遺門」等あり、而して「原人論」の如きも亦中唐  
 末に成れる者とす、此外中唐に於ける禪書の名ある者  
 は百丈禪師の「百丈清規」、石頭の「參同契」等なりとす。

晚唐時代の禪風

當時の高僧

皇紀一千四百九十六年、玄宗の開成元年より、後梁の開  
 平元年に至る七十一年間、歴史は之を晚唐と云ふ、開成  
 五年、宗密禪師寂して、後二年ならずして、武宗位に即き、  
 改元して會昌と云ふ、會昌の五年は支那に於ける第三  
 次の廢佛毀釋なりき、然れども此又二年ならざるに宣  
 宗位に即て、佛敎を回復す、當代に於ける禪風を一考す  
 れば、青原系に藥山、惟儼あり、雲巖、曇晟あり、洞山、良价あ  
 り、雲居、道膺あり、曹山、本寂あり、しかして南嶽系に黃檗、  
 希運あり、臨濟、義玄あり、興化、存禘あり、仰山、慧寂あり、德  
 山、宣鑒あり、雪峰、義存あり、雲門、文偃あり、趙州、從諗あり、  
 玄沙、師備あり、潞山、靈祐あり、仰山、潞寂ありて、茲に五家  
 分裂すべき時期とはなりぬ、實にこれ前代未聞の大宗

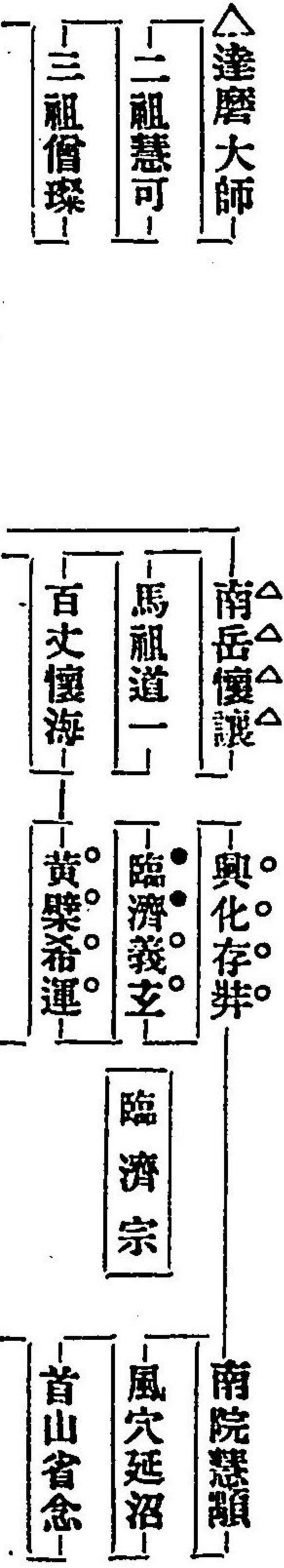


師家を出したるの時にして禪史上の偉觀と謂つべし。

●印は分派の命稱と祖師の名とを注意せしむる爲にして、○印は晩唐時代に存在せる祖師なり。

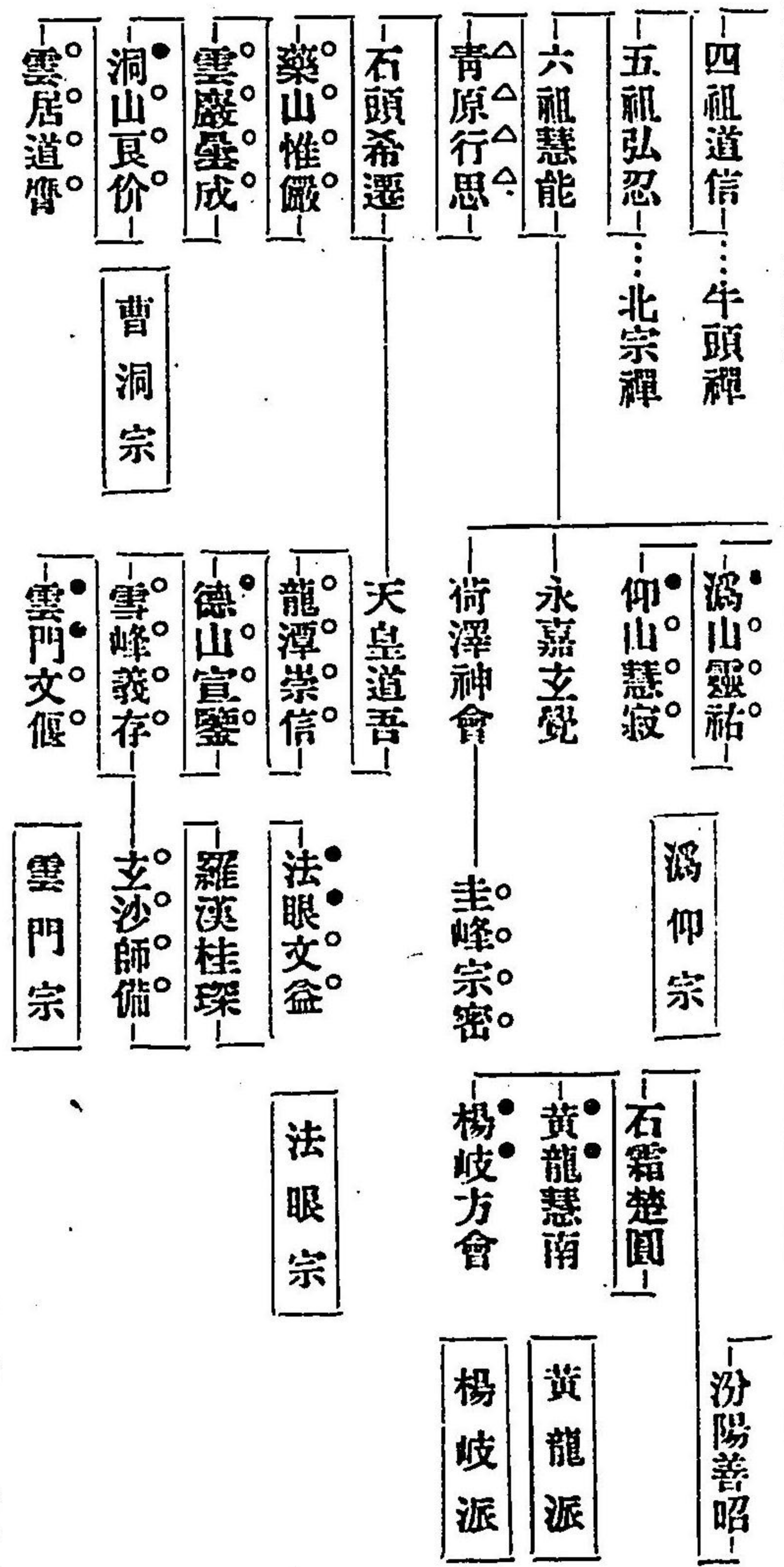
因に記す、瀉山は大申七年八十三にして寂し、同十三年仰山寂す、瀉仰宗の名此二人より起る、咸通七年臨濟義玄寂す、之を臨濟宗の開祖とす、同十年洞山良价六十三にして寂す、之を曹洞宗の開祖とす、雲門文偃其死生月を審にせずと雖も、晩唐末の人に於て雲門宗の開祖たり、而して上叙宗師の中義玄が北方の鎮州臨濟院に在りし外他は皆南方に在りしを以て、當時神秀下なる禪風の北方に勢力ありしは當然のことなりとす。

五家七宗分  
裂の圖



瀉山警策傳  
心法要寶  
鏡三昧

④ 依此觀之瀉山警策は晩唐初代の著にして黃檗の傳心法要「宛陵錄」次で出で、洞山の「寶鏡三昧」は其中代、咸通の初年に作られたるべく、而して玄衛禪師の眞門聖胃集は晩唐の將に終らんとする數年前の作なりとす。



其他當代の師家

⑤ 此外石室善道、大悲寰中、弘辨禪師、全植禪師、夾山善會、長慶大安、岩頭全豁、石霜慶誌、靈雲禪師、徑山洪誼、劉鐵磨、玄沙宗一、投子大同、布袋和尚等一流の師家は正に晩唐の年間に出没し、同時に相國裴休等ありて、大に其教筵を扶けたり。

結尾

⑥ 之を要するに、初唐の分裂は正傳一個の禪をして二流の旁系を出し、因て以て正統、牛頭、北宗の三たらしめ、終に晩唐に至りて、瀟仰、臨濟、曹洞、雲門の四宗を出しぬ、然れども瀟仰宗の系統は唐末五代の頃亡びたりと謂つべきか、されば五家七家と稱する四宗は當代に分裂せしも、他の一宗二派、即ち法眼宗、黃龍派、楊岐派の分裂は果して奈何。

時代區劃

第四節 唐朝以後宋代の禪風

① 皇紀一千五百六十七年、唐朝終を告げ、太祖朱全忠位に即き、改元して開平と云ふ、歴史は之を後梁と稱す、後梁僅かに十六年にして後唐となる、實にこれ皇紀一千五百八十三年なり、此より三十七年の間に、晋となり、漢となり、周となり、皇紀一千六百二十年、趙匡胤位に即き、改元して建隆と云ふ、歴史は之を趙宋と稱す、此間大約三百年、これ又佛教史上重要な時代にして、同時に禪宗史上のそれなり。

② 後梁の太祖開平二年、雪峰寂し、同四年投子大同寂す、續寶林傳は、此年間南嶽の三生藏によりて成れるものなり、次で貞明二年布袋和尚寂す、當時天臺の三大部は高

唐末五代の禪風續寶林傳

一宗の難

麗國より諦觀によりて將來せらる、次で後唐に入るや、龍牙居遁、保福從展、羅漢桂琛等前後して逝く、桂琛は實に法眼宗の祖たる清凉文益の師なり、未だ幾許ならずして晋の世とはなりぬ、大藏經音義四百餘卷、陰符經等は當代に成りし者なり、晋朝二世十一年にして漢となる、劉漢即ち是なり、漢の高祖乾祐二年雲門文偃寂す、之を雲門宗の祖とす、漢室二世四年にして周となる、周の太祖、佛を信せしも二代の世宗甚だ之を惡む、顯徳二年終に廢佛令を出して、寺院三萬餘所を廢し、銅像鐘磬を銷毀して通錢を鑄る、之を一宗の難と云ふ、當時諸宗の高僧多くは逝き、經論の章疏散逸する者多し、翌五年清凉文益寂す、即ちこれ法眼宗の祖なり。

雲門宗法眼宗の分裂

宋代の佛敎と禪風

③之を要するに唐より宋初の禪風は、雲門宗、法眼宗の分裂を致したる而已にして、別に記すべきとなし、鏡清道付、鼓山神晏、龍華靈昭、長慶慧稜、白雲智暉ありと雖も、由來唐末五代の亂に壓迫せられて、只禪風を持続するに過ぎざりき。

④宋朝三百年間の禪風は、唐朝二百八十餘年間の如く最も注意すべき時代にして、支那哲學の訓古的たりしに反して、愈々革新の趨勢となり、此と共に禪風も天台、密敎、律、華嚴等と相並んで、盛況を呈し、爲に法相宗の如き唯物的の宗風は衰ふるに至れり、然れども宋代の密敎は寧ろ悲觀の時にして、禪の如きは各宗中第一位の盛觀を致せしなり。

宋代の禪風

宗鏡錄 萬善  
同歸集 宋高僧傳 出づ

禪風の變化

⑤ 宋の初葉に當り、洞山系統に同安同丕、同安觀志、梁山緣觀あり、臨濟下に南院慧顛、風穴延沼、首山省念等あり、天台の徳詔、五雲志逢、道詮、禪師等又主なる者とす、而して天台に於ける師會、觀復、希迪、道亭の如きは當代の四大家として名あり、殊に法眼下の三世たる智覺、延壽、出でて、宗鏡錄百卷、萬善同歸集六卷等を著はし、贊寧出で、宋高僧傳三十卷、僧史略三卷、其他三教聖賢事跡百卷等を著はせしは、宋代の初め、太宗の前後なり、加之ならず、彼の三藏聖教序、釋崇論、四十二章經註の如きは、眞宗帝の作なるべし、彼の景德傳燈錄三十卷は、當時、道原禪師によりて成りし者なり。

⑥ 由來宋初は漢詩隆盛の極に達し、爾後眞宗帝の代は、唐

廣燈錄 祖英  
集出づ

詩の模倣顯はれ、文壇の重鎮決して少からず、此時に當り、眞宗の末年に雪竇出づ、雪竇は禪學者たると同時に一代の詩星なり、茲に至つてか、禪風大に一變し、苟にも詩風を帶ぶるに至れり。

⑦ 降て仁宗帝の初め、廣燈錄卅卷は護國將軍李遵勗によりて成り、同帝明道元年、祖英集二卷成る、此は雪竇の詩文を門人の編輯せし者なり、降ると十有四年、即ち慶曆六年、楊岐方會寂す、方會は臨濟より八傳の祖にして、楊岐派の開祖なり、次で皇祐四年、雪竇寂す、師は明覺大師重顯と云ひ、雲門中興の祖なり、之より先、歐陽修ありて一家の學を唱へ、廬山に至りて、祖印居訥、禪師と儒佛を論じ、蘇老泉又往て法を問ふ等、名士の參禪また少から

輔教編傳法  
正宗記 正宗  
論出づ

外部の思想

八 此と同一に周茂叔程明道程伊川等出で、宋明性理學の  
す、帝深く禪に歸し禪風此より興れり。  
盛んならず皇祐元年内侍允寧奏して京に禪刹を創立  
る者なり、當時は江南湖北に臺、禪行はると雖も、京邑に  
其作にして、彼の「鐔津文集」十九卷は契嵩の文を集めた  
風の發展に力む、傳法正宗記「正宗論」「定祖圖」一面等も亦  
議六卷の般若經にだも及ばずとの言あらしめ、専ら禪  
「輔教編」六卷を著はし、排佛家たる李泰伯をして「予の論  
張る、楊岐は臨濟より七傳の祖にして、楊岐派の開祖な  
り、雪竇の寂に先つ二年、雲門宗五世の孫たる契嵩禪師  
な當代の高徳なり、楚圓仁宗の歸依を得、禪風を京師に  
す、慈明楚圓、浮山法遠、楊岐方會、天衣義懷、白雲守端等皆

臨濟系の二  
大分裂

宋の哲宗帝  
前後三十年  
間の禪風

基礎を造り、天臺に智禮遵式出で、山家山外の爭論太  
だしかりき。  
九 降て神宗の熙寧二年、黃龍慧南寂し、同四年契嵩寂す、慧  
南は臨濟下七傳の祖たる、慈明楚圓の法を受け、黃龍派  
の開祖なり、以此觀之、五代の末葉より宋朝の初めに當  
りて、臨濟系の禪風二つに分れ、一は楊岐派となり、他は  
黃龍派となりしなり。  
◎ 神宗の熙寧九年、門人守堅、雪門録を編輯す、同十年王安  
石あり、金陵の舊宅を寺と爲し、眞淨克文をして居らし  
む、王安石は張商英と共に當代參禪の士たり、降て哲宗  
の元祐年間に、宗鏡録の大要を録したる、冥樞會要三卷  
成り、元符年間に、東越禪師祖庭事苑八卷を著す、同三年東

當代の禪書  
續燈錄 禪苑清規 林間錄  
清規 林間錄  
禪林僧寶傳  
石門文字禪  
臨濟錄

印禪師寂ず、東印は廬山、金山、雲居等に住して當代の名士皆其徳を仰ぐ、建中靖國元年、法雲佛國禪師續燈錄卅卷を著し、崇寧二年、慈覺宗頤の禪苑清規一卷及惟勉の校定清規一卷成り、大觀元年、洪覺範の林間錄成る、覺範は眞淨克文の資にして、黃龍派の系統に屬す、禪林僧寶傳卅卷、石門文字禪等は其著なり、翌々四年、張無盡の護法論二卷出づる等、禪門の著書甚だ盛んなりき、明れば政和年間、圓悟克勤碧巖にありて、百則の頌古を評唱し、碧巖の門風大に振へり、次で宣和年間、臨濟録は門人の手によりて成る、神宗の頃より宣和に至る高祖を擧れば、楊岐系に白雲守端、五祖法演、佛鑿慧勤、龍門佛眼、大慧宗杲、虛丘紹隆等あり、黃龍系に東林常總、黃龍祖心等あり、

當時の高僧

信心銘 拈古  
無盡燈記

碧巖集、宗門統要、大慧の開教

り、雲門系に智門光祚、雪竇重顯、天衣義懷、圓照宗本、法秀等あり、曹洞系に同安觀志、梁山緣觀、太陽警玄、投子義青、芙蓉道楷、丹霞子淳、眞歇清了等ありて、各々宗風の煽揚に力む、殊に道楷禪師は當代に於る禪の弊風に改善を加へ、正統の禪風を發揮するに腐心し、眞歇禪師又「信心銘拈古」一卷、無盡燈記等を著はして道楷に倣へり。  
②次で南宗の建炎元年、欽宗帝深く圓悟を信じ、使を遣して禪法を聞き、圓悟とは欽宗の賜號なり、此年圓悟の「碧巖集」は編成せられ、超て紹興二年、大慧語録十二卷、宗門武庫等の教演は開かれぬ、翌三年、宗永禪師「宗門統要」十卷を著はし、同五年、圓悟寂す、圓悟と時を同うして宏智正覺あり、天童山に住して當代の重鎮たり、語録、頌古等

天童小參錄 出づ

黙照禪と看話禪の起源

翻譯名義集 出づ

僧寶正續傳 羅湖野錄 宏智廣錄 出づ

甚だ多く、天童小參錄二卷の如きは、當時侍者、中翼等の編する所にして、宏智の提撕なりとす、然るに當時大慧、宏智を中心として、其門弟の間に争は生じぬ、此争よりして大慧派は宏智派を難するに黙照の邪禪と云ひ、宏智派は又大慧派を難するに看話禪と云ふ、されど此は宏智と大慧との争と云はんより、寧ろ門弟の争なりと謂ふべきか、紹興十三年、普潤法雲、翻譯名義集を著す、本書は佛教辭典の如く甚だ便宜を極む、當時又應菴曇華あり、虎丘紹隆の資にして、圓悟の法孫たり、大慧と並べ稱して二甘露と云はる、語録十卷、藏經中に在り。

③紹興廿七年、宏智廣錄九卷成る、門人の編する所、同三十年、曉瑩禪師、羅湖野錄二卷を著はす、密菴咸傑、松源崇岳、

禪門寶訓 東山外集等  
榮西禪師來

天童自鏡、破菴祖先(楊岐系)自得慧暉、明極慧祥、天童宗班(曹洞系)等皆な當代前後の高僧なり、孝宗の隆興元年、帝使を遣して道を大慧に問ふ、大慧此年八月寂す、應庵曇華又同じし、而して石室祖琇の僧寶正續傳七卷、隆興佛教編年通論廿八卷、また此年間に成る、僧寶正續傳は、洪覺範の僧寶傳に反したる者也。

③降て乾道の頃、虛庵懷徹あり、天童に住して門葉を接する、と、次で淳熙年間、禪門寶訓二卷は淨善に依て重集せられ、當時又東山語録、東山外集等は出でぬ、同十年、孝宗自ら圓覺經を註し、寶印禪師に賜ふて刊行せしむ、同十三年、先に大慧によりて説かれた提唱は、門人によりて「大慧武庫」と成りて刊行せられ、翌十四年、日本榮西禪師

入宋して虚庵懷敏に參じ、法を傳て建仁寺開山となる、然あれは現今日本の建仁寺派は、支那臨濟系の中、黃龍派に屬する者と知るべし。

叢林公論同  
盛事從容錄  
普燈錄等出

道元禪師來

④淳熙十六年、惠林の「叢林公論」一卷、晦翁悟明禪師の「宗門聯燈會要」卅卷成り、翌紹熙元年、大慧普說「五卷門人慧然」によりて編輯せられ、同二年、章州の萬松行秀禪師禁中に禪法を説き、寧宗の慶元三年、叢林盛事二卷、道融によりて選述せらる、當時、曹洞系に雪竇智鑑あり、天童如淨あり、楊岐系に靈隱法薰あり、淨智智慧あり、智慧の法は後に南禪寺の清拙正澄に依りて日本に傳へらる、降ると十有五年、即ち嘉定五年、破菴語錄は、門人圓照に編輯せられ、同十五年、日本道元禪師入宋して、無際了派、浙翁如

祖燈錄從容錄出づ

無門關如  
淨語錄人天  
寶鑑出づ

瑛元鼎等を歴問し、次で天童如淨禪師に謁して、留ると前後五年、如淨の法を得て歸朝し、永平寺を開きて、日本曹洞宗の第一祖となる、同十六年、有名なる「從容錄」は萬松行秀によりて成る、行秀また「祖燈錄」六十二卷、「請益錄」辨宗記等を著はして、當代の禪風を高からしむ、翌十七年、普燈錄卅卷は、雷菴虚中によりて選述せらる、當時、楊岐派九世の孫、無準師範及無門慧開等の聲價最も高し。⑤理宗の紹定二年、無門關一卷、無門慧開によりて著され、「如淨禪師語錄」二卷、侍者文素によりて編成せらる、人天寶鑑一卷も、此年間、曇秀禪師の手に成たる者にして、教律禪及孔老の調和に力む、瑞平二年、圓爾辨圓入宋して、無準師範の法を得、在宋前後七年にして、淳祐元年に歸



聖一國師來

大光明藏  
禪門宗要

蘭溪道隆日  
本に渡る

法燈國師來

正宗贊

還し、東福寺開山第一世となる、現今の臨濟宗東福寺派  
是なり。

⑤嘉熙淳祐の年間傳燈大光明藏四卷寶曇橘洲によりて  
成り、此と前後して禪門宗要十卷雪山曇公に集成せら  
る。淳祐六年蘭溪道隆は日本に渡りぬ、隆は楊岐派八世  
の孫にして、日本建長寺開山第一世となる、現今の臨濟  
宗建長寺派即ち是なり。

⑥同九年心地覺心入宋して無門慧開(佛眼禪師)に參し、在  
宋前後六年法を得て寶祐二年に歸り、日本由良の興國  
寺開山第一世普化宗の祖となる、法燈國師是なり、覺心  
入宋後二年にして彼の癡絶禪師語録二卷は成り、此年  
又無象靜昭、日本より來る、次で寶祐二年、正宗贊四卷は

徹通義介

南浦紹明來

宋末の大事

希叟紹曇によりて著され、翌三年海雲禪師寂す、後四年  
即ち開慶元年、道元禪師の資徹通義介入宋し、天童山に  
登る、南浦紹明の入宋も亦此前後なりしなり、而して彼  
の「人天眼目」四卷の如きも、晦岩昭公によりて宋末に成  
りたるもの、如し、叙し來れば宋代三百年の禪風は其  
初め分裂に起りて終に輸出となり、支那を中心とせる  
の禪風は、東方に推移して日本に在るとなりたるの  
時、中華前代未聞の事變は起りぬ、即ち元の世祖忽必烈  
は捲土の勢を以て宋代三百年の泰平を破り、宋を亡し  
て自ら此に代り、改元して中統となし、元朝始て茲に建  
つ、實に皇紀一千九百二十年なり。

第五節 元朝時代の禪風

元朝に於ける禪風の概括

元代の禪風

○皇紀一千九百二十年世祖位に即てより惠宗の至正二十七年に至る大約一百〇八年間、歴史は之を元朝と稱す、此間破菴下の高峰原妙、中峰明本、白雲以假、斷崖了義等禪門の巨壁無にあらざるも、其大勢多くは日本に入りたるを以て、當代の禪風は寧ろ不振の地位にありたるが如し、只臨濟系の禪風のみ比較的盛んなる者ありき、而して本期間に注目すべきは、教禪の一致、殊に禪と淨土との一致にして、又道教と禪との接近し來りたる是なりとす。

○元の世祖太だ佛に歸し、教風の發展に力む、海雲印簡世祖に召され、劉秉忠と共に行く、劉はもと禪僧にして世祖を扶けて大功あり、景定元年、兀庵普寧日本に入る、寧

佛祖統記成る

參究念佛

日本圓覺寺の分裂派

は無準師範の資にして、日本建長寺の第二世となる、枯崖圓悟の著なる「枯崖漫錄」三卷は此年重刊せらる、次で咸淳元年、無象靜昭は、圓悟克勤六世の孫たる石溪心月に法を得て日本に歸り、同三年南浦紹明、虛堂智愚の法を得て日本に歸り、建長寺十三世となる、同六年大休正念、石溪心月の法を得て日本に歸り、淨智寺開山第一世と爲る、同年佛祖統記志磐によりて成る、當時智愚の聲名天下を壓し、深く朝廷の信を得たり、同九年無文印、廿卷侍者惟康等によりて編成せらる、無文印は、無文禪師の詩集なり、當時天目中峰念佛を唱へ、智徹禪師、參究念佛を主張す。

○至元十八年、元大舉して日本を撃つ、此年無學祖元、日本

蓮宗寶鑑出づ

禪林類聚成る

に入る祖元は無準師範の資にして、日本圓覺寺開山第一世となる、後の臨濟宗圓覺寺派即ち是なり、此と同時に鏡堂覺圓日本に入る、覺圓は無準師範二世の孫なり、至元末に至り、普度の「蓮宗寶鑑」は成る、即ち是禪淨の干繫を述べたる者にして、當代の禪風は正に此書によりても知べきなり。

④降て成宗の大徳三年、一山一寧日本に歸化す、寧は密庵咸傑三世の孫、頑極行彌の資にして、日本南禪寺の三世となる、同十一年「禪林類集」廿卷、楊州天寧寺の善俊によりて撰集せらる、部門を分つと一百二十、禪宗公案集とも謂つべし、此年雪村友梅來朝して寧一山の法を得、歸て日本建仁寺の三十世となる、武宗至大元年、東里弘會

備用清規

禪居集

幻住清規

日本方廣寺派の分裂

日本に入り、同四年廬山の澤山咸公禪林備用清規十卷を著す、當時天目中峰聲名最も現はれ、古先印元、千岩元長、無隠元晦、遠溪祖雄、復菴宗已等、日本より參學する者多し、仁宗の延祐二年清拙正澄禪居集一卷を著し、同四年、中峰幻住清規一卷を著す、次で英宗の至治元年、月林道皎來朝し、古林茂禪師に參して法を得、歸還して日本大梅山長福寺開山第一世となる、泰定二年、古林茂禪師語録五卷、門人の手に成り、翌四年、清拙正澄日本に入り、至順元年、明極楚俊、竺仙梵僊等相携て日本に入る、次で惠宗の至元二年、無文元選來りて無準師範四世の孫たる古梅無友の法を得、留ると八年にして歸還し、方廣寺開山第一世となる、是に日本臨濟宗方廣寺派の祖なり、而

勅修清規、  
釋氏稽古略、  
佛祖通載出

護法論、六學  
僧傳

して又此年中、東陽德輝の勅修清規四卷、及華亭念常の佛祖通載三十卷は成り、同九年天如和尚語錄九卷、善遇に編成せられ、同十三年釋氏稽古略四卷、寶洲覺範の手に成る、而して彼の至元傳燈錄の大成せられたるも當時にして、著者雲壑禪師は、當代異論百出せる正脈を論斷して、龍潭信を馬祖下に屬せしめたり、當時日本の僧無我省吾、金陵の牛頭山に在て禪風を舉揚し、手頭の禪風一時振ふとを得たり、至元十一年、洞山下十七世の孫東陵永興、日本に入り、南禪寺三世となる、雖も實に是曹洞禪の第二傳なりとせざるべからず、同十六年、覺隱本誠、性學指要十卷を著し、人性の善惡を論じて、朱晦庵を駁しぬ、而して彼の宋濂居士が護法論十卷の如き、夢

堂曇暈の六學僧傳の如き、孰れも元末明初の著にして、濂居士の如きは、當代有名たる禪門の士にして、教筵を扶くると大なりと謂つべし。

第六節 明朝以後の禪風

○皇紀二千〇二十八年、太祖朱元璋、都を金陵に定め、改元して洪武と謂ふ、歴史は之を呼で明朝と稱す、太祖甚だ禪味あるの人なるを以て、法運此より興る、明代の高僧には、天童圓悟、車溪性中、馨山圓修あり、同七年、慧海、頓悟入道要路門二卷を撰し、同九年、門人千巖和尚語錄二卷を編す、次で廿年中、峰廣録三卷、門人の手に成り、此と前後して、續原教論、佛法金湯篇一卷出づ、次で成祖永樂四年、道衍、道餘録を作りて、程朱の排佛に答へ、同十五年、南

道餘録、續傳  
燈錄

頓悟入道要  
路門

明代の禪風

歸元直指集  
尚直篇正理

禪宗正脈  
宗門正燈

續高僧傳  
家龜鑑指月

明高僧傳  
東坡禪集  
門玄鑑圖禪  
關策進竹

窓三筆

分燈錄釋迦  
諸佛祖綱目  
續釋氏稽古  
略

石文琇太祖の詔によりて「増集續傳燈錄」六卷を撰す、當時、空谷、曉庵、物外等あり、又一元宗本の「歸元直指集」も當時の作なり、降て英宗の正統五年、宋儒の排佛に答へたる空谷景隆の「尚直篇」二卷及藏經中の偽經を論せる「正理篇」一卷出で、孝宗の弘治二年、禪宗正脈成り、同十四年、宗門正燈錄十二卷、濃陽英朝の手に成る、當時王陽明あり、禪ならざる静座冥想をすゝめて學界を風靡す。

② 降て神宗の萬曆三年、道宣續高僧傳四十卷を撰し、同年、朝鮮の僧、宗、逐、禪家龜鑑を著す、同十年、指月録廿二卷、水月、瞿汝稷に編成せられ、十五年、明高祖傳八卷は、主盟衆先の共選する所たり、同十八年、徐長儒、東坡禪喜集九卷を撰す、同十八年、雲棲株宏、禪關策進を撰す、其外、竹窓

三筆三卷、緇門崇行錄、自知錄、山房夜話、二卷、山房雜錄、三卷、楞嚴經模象記、淨土疑辨、等三十餘部の著あり、同三十五年、少室山覺虛、宗門玄鑑圖を著し、同三十九年、門人、成正、博山、禪警語二卷を撰す、參禪の工夫説得て妙なり。

③ 萬曆の頃、憨山、德清あり、憨は雲谷法會の資にして、圓覺經直解三卷、金剛決疑、夢遊集五十五卷、憨山語錄廿卷を始として、著書最も多し、降て毅宗の崇禎五年、朱時恩居士の「分燈錄」二卷、僧祐の「釋迦譜」十卷、等出で、次で七年、朱時恩又「佛祖綱目」四十一卷を撰述す、同十年、幻輪の「續釋氏稽古畧」出づ。

藕益大師も又當代の人、其著、楞嚴經玄義三卷、楞嚴經文

句「十卷」毘尼集要十七卷、閱藏知津四十八卷を始として

總結

六十有餘種の大著あり。

④之を要するに明朝二百七十六年の日月ありと雖も、一

般佛教は寧ろ衰頽に傾き、唯り禪宗其上にありて比較

的盛んなる者の如し、然れども隋唐以前より禪と念佛

の接近は時代を経るに従て天臺華嚴等と接近し來り、

一種變體の禪風を生ずると共に、儒佛道の接近となり

て、當代に及べるとは注意すべきともなり。

清朝

⑤皇紀紀元二千三百〇四年、明亡て清朝となる、明以後の

佛教殆んど記すべきとなし、禪にありては、世祖の順治

十年、費隱通容「五燈嚴統」三十卷を出したるを始として、

其他の著書及高僧無にあらざれども、唐宋時代よりし

五燈嚴燈

て支那正傳の禪風は直に日本に入り來りたるを以て  
今は茲に筆を改めて日本に移らんとす。

日本之部

第一章 鎌倉以前に於ける禪の傳來

道昭の禪

道璿と北宗

○日本禪宗の初傳は鎌倉時代の初、榮西禪師に在るとは明かなるも、榮西禪師に先つと凡五百三十餘年、即ち孝徳天皇白雉四年、道昭入唐して二祖慧可の資なる慧滿禪師に見へ、楞伽經四卷を携て法相宗と共に傳ふるを嚆矢と爲す、降ると約八十餘年、聖武天皇天平八年、福先道璿來朝し、律と共に禪を傳ふ、璿は北宗神秀下三世にして、嵩山普寂の資たり、降ると約六十餘年、即ち桓武天皇延暦廿二年、叡山の傳教大師入唐して大安行表、儵然禪師に參じて禪を得たり、行表は道璿の資なるを以て北

傳教と牛頭  
禪  
義空の禪

慈覺の禪、覺  
阿の楊岐禪

能忍と楊岐  
の禪

宗に屬し、儵然は牛頭下なれば傳教の禪は北宗牛頭の混淆禪なると共に圓密禪、戒の混合なるを知るべし、降ると大約三十年、仁明天皇承和の頃、義空禪師、檀林皇后の請に應じて來朝し、禪法を説と年あり、義空は南岳下の二世鹽官國師の資にて本邦檀林寺開山第一世となる、後幾許ならずして郷國に歸還す、同五年、慈覺圓仁入唐し、蕭慶中居士より禪法を得て歸り、降と三百三十二年、高倉天皇承安元年、叡山覺阿上人入宋して、圓悟克勤の資なる佛海慧遠の印可を得て歸り、高倉帝に禪法を説けり、之を南宗禪、楊岐系の初傳とす、降ると十八年後、鳥羽帝の文治五年、大日能忍禪師、己が禪法の師承無を憂へ、門弟二人を入宋せしめて、克勤下二世拙庵徳光の

日本禪の起  
元ならずる  
理由

印可を得たり、之を楊岐派禪の第二傳とす、孤雲懷奘の如きは、其初能忍の資たる佛地覺晏に隨侍したる者なり。  
②之を要するに道照傳教、道瑤覺阿等皆教禪混和の禪にして、又旁系の禪たるを免れず、能忍其正統系に依ると雖も、未だ南宗禪の粹なるべくもあらず、此を以て鎌倉以前に於ける禪は許すに日本禪宗の起元と稱すべからざるなり。

第二章 鎌倉時代の禪風

緒言

①皇紀一千八百四十六年、後鳥羽帝文治元年、賴朝鎌倉幕府を設し、より後醍醐帝の建武元年に至る約一百五十

榮西と黃龍  
系の禪

建仁寺派

興禪護國論  
喫茶養生記

年間之を鎌倉朝と定め、此間の禪風を一括して鎌倉朝時代の禪風と云へ、更に之を臨濟と曹洞の二宗に分て記述する所あらんとす。

第一節 臨濟宗の開立

②文治三年、榮西禪師入宋して法を黃龍派八世の孫、虛庵懷蔽に得、在宋前後五年、建久二年に歸朝し、筑前の報恩寺、博多の聖福寺を開きて、後賴朝の請に赴き、建仁元年、京都に建仁寺を創す、建仁寺派之より起る、當時南都佛敎の徒、榮西に抗せしを以て、興禪護國論四卷を著して、南都に應ふ、出家大綱、一代經論總釋、三部經開題、喫茶養生記等、孰も當時の著なり、建仁三年、實朝の招に應じて、鎌倉に壽福寺を開き、關東に始て禪を傳ふ、門下に行勇



教禪混淆

圓爾辨圓

南禪寺派の

祖 建長寺派の

③ 榮西建保二年に寂して後、凡そ二十一年、四條天皇嘉禎元年圓爾辨圓入宋して、楊岐下八代の孫無準師範の禪を傳へ、東福寺を創して第一世となる、東福寺派之より起る、門下に東山湛照(萬壽寺)無關普門等廿有餘人あり、無關普門は後龜山上皇の歸依を得、南禪寺を創して(仁永元年)第一世となる、南禪寺派之より起る。

④ 辨圓歸朝後四年、即ち寛元三年、蘭溪道隆來る、隆は楊岐下八世の孫、無明慧性の資にして、鎌倉の禪風に一偉彩を與へ、北條時頼の歸依を得て、建長寺を創く(五年)建長寺派之より起る、門下に德儉、道然、德悟等二十餘人あり、門風太だ榮ゆ、約翁、德儉の門下愈々榮え、寂室玄光、出藍の稱あり、後玄光、永源寺を創して(五年)第一世なる、永源寺派之より起る。

祖 永源寺派の

宋 心地覺心入

兀菴來る

⑤ 次で建長元年心地覺心入宋して、楊岐下八世の孫、佛眼禪師に參じ、同六年法を得て歸り、興福寺を開きて、開山第一世となる、普化宗の祖、法燈國師即是なり、門下に東海、妙源、高山、慈照、古劍、知訥等出で、門葉太だ榮ゆ、同年無象、靜照の入宋あり、後、と六年山叟慧雲の入宋あり、次で文應元年、兀菴普寧來朝す、兀は楊岐派八世の

あり、次で文應元年、兀菴普寧來朝す、兀は楊岐派八世の

大休正念  
來き

祖圓覺寺派の

孫無準師範の資にして、北條時頼の歸依する所となり、  
 鎌倉壽福寺に住せしも居と四年にして歸宋せり。  
 ⑥ 文永六年、大休正念來る。正念は楊岐下九世の孫石溪心  
 月の資にして、鎌倉淨智寺開山第一世となる。佛源禪師  
 則ち是なり、門下に峻崖、巧安、大川、道通、鐵庵、道生等出で  
 て法燈大に輝けり、降ると七年、元菴寂し、翌八年、道隆禪  
 師寂す。治安三年、北條時宗の招に應じて無學祖元、鏡堂  
 覺圓と共に來朝す。祖元は無準師範の出にして、辨圓、普  
 寧等と同僚たり、當時支那は元の代となりて、此年元兵  
 大舉して入寇せしとは、歴史上の偉觀なりき。祖元始め  
 建長の五世となり、次で時宗、圓覺寺を開創して開山第  
 一世となる。時に弘安四年にして、來朝の翌歲なり、圓覺

圓光禪師

一山一寧來  
る

寺派之より起る、佛光國師則ち是なり、門下に規菴、祖圓、  
 太古、世源、高峰、顯日等十有三人を出し、高峰最も名あり、  
 蓋し祖元の門風は、高峰によりて大に榮えたりと云ふ。  
 べし彼の夢窓國師の如き實に其門下たりしなり。  
 ⑦ 祖元の來朝後十二年、即ち永仁元年、南禪寺成り、同四年  
 可庵圓慧元に入る、居ると十有三年、延慶の始に歸朝し  
 て化を上總に振ふ、圓光禪師則ち是なり。  
 ⑧ 次で三年、後伏見帝正安元年、元の僧一山一寧、西礪士曇  
 等相尋で來る、一寧は楊岐派七世の孫、頑極行彌の資に  
 して、來朝の初、北條貞時の疑ふ所となり、伊豆の修禪寺  
 に幽閉せられしも、後釋て建仁、圓覺、南禪寺等に歴住し  
 終に後宇多上皇の歸依を得たり、妙應弘濟禪師則ち是

月林道隱虎關

なり門下に無惑良欽石梁仁恭雪村友梅等を出だし、雪村の詩書當代に冠たり、當時鏡堂覺圓京都の建仁にありて化を振ふと頻なりき

⑨次で徳治二年雪村の入元となり、延慶元年東里弘會の來朝となり、翌二年竺隱梵仙の入元となり、正和五年遠溪祖雄天目中峯の法を得て歸朝し、元應元年天岸等同志十人支那に航し、同年又靈山道隱來朝し、翌二年寂室玄光可翁然鈍庵俊共に入元し、元享元年月林道皎元に入り、同二年虎關師鍊元享釋書を著はして帝覽に供す、虎關は辨圓下二世の孫にして、濟北集、佛語心論、聚文韻略、十禪支錄、禪儀外文、禪戒規、宗門十勝論等著書太だ多し。

通翁と當時の佛教

當時の高僧

宗峰妙超

大徳寺派の祖

⑩正中元年八宗競ひ起りて禪宗を排けんとし、以て宮闕に牒訴す時に通翁鏡堂出で、清涼殿に上り、延暦園城東寺、南都の諸學徳と大問答を開き角論相交ゆると一週日、諸學徳爲に降りて弟子の禮を取れりと云ふ、其他當代の高僧を數ふれば、天岸慧廣、東海竺源、孤山至遠、元翁本元、孤峯覺明、中巖圓月、高山慈照等屈指に違あらざるなり。

⑪嘉暦元年、宗峰妙超紫野に移りて、一小菴に棲居す、道俗歸依する者多し、赤松圓心(村)巨資を投じて寺を建て、龍寶山大徳寺と云ひ、妙超を請じて開山第一世と爲す、大徳寺派之より起る、興禪大燈國師即ち是なり、妙超は楊岐下十一世の孫、南浦紹明の資にして、門下に關山慧玄

雪村清拙、楚俊

白翁宗雲、徹翁義享等を出し、門風永く榮えたり、彼の天  
秀の「江湖風月集」は當時の著なるが如し、同二年清拙正  
澄、無隠元晦、古先印元等共に歸る、清拙盛んに禪宗の古  
式を唱道し、其著大鑑清規、廣く用らる、同三年雪村友梅  
歸朝す、其著岷峨集は詩壇の華なり、次で元徳二年、明極  
楚俊、竺僊、梵仙、相携て來朝す、明極は楊岐下の八祖、虎岩  
淨伏の資にして、楠公、湊川に死するに先ち、生死の大問  
題によりて、公に一大安心を與へたるにて、名あり、竺僊  
又楊岐下十世、古林清茂の資にして、淨妙、淨智、南禪等に  
歷住す、南禪寺が天下第一刹となりしは、即ち當時なり  
き、當時又月林道皎、石室善玖等共に古林茂の法を嗣で  
來る、月林は長福寺開山第一世、普光大幢國師、即ち是な

楚俊後の禪風

道元禪師の出世、能光と洞山

③其他當代の高僧及支那との往來甚だ盛んなりと雖も、  
楚俊來朝後三年にして、鎌倉幕府終を告げ、世は南北の  
兩朝となり、延元三年、室町幕府となりしを以て、臨濟の  
禪史もこゝに筆を止め、更に同代の曹洞宗を通觀せん  
と欲す。

第二節 曹洞宗の開立

①榮西禪師所傳の禪は上叙の如く、黃龍派の正統に屬す  
と雖ども、其實教禪の混淆と云ふを正當と爲す、然るに  
榮西入宋に先つと凡そ二百五十餘年、則ち朱雀天皇の  
朝、能光なる者、唐(後)に入りて、洞山良介禪師に見へ得法  
の印可を受と傳ふるも、彼は蜀に於て寂せしを以て本